世界の崩壊とリセット

金剛時雨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

謎のウイルスによって世界が混乱と崩壊に包まれる中、日本の床主市のとある学園で１人の高校生と仲間たちは生ける屍の大群から脱出していった、果たして彼らに待つのは安全な世界か、それとも絶望の世界か……

※２０２０年１１月１８日　第１話～第５話まで再編集しました

※２０２１年１１月　９日　第７，８話まで再編集しました

目次

第1話　崩壊する世界 ―― 1
第2話　合流そして職員室へ！ ―― 15
第3話　外道と一時の安息と少女達 ―― 27
第4話　ひと時の平和と拓真の正体 ―― 41
第5話　その頃…… ―― 54
第6話　短き休息と希里親子 ―― 65
第7話　ミニガンは世界一最高の武器だ！ ―― 79
第8話　大隊合流！その頃太平洋で…… ―― 93
第9話　望まぬ形での再会と騒動 ―― 103
第10話　作戦変更とゴミ処理 ―― 115
第11話　散る命と選択肢 ―― 129
第12話　空港制圧 ―― 146
第13話　決意 ―― 160
第14話　害虫駆除 ―― 173
第15話　日本の終わり、脱出 ―― 191
第16話　囮 ―― 210
第17話　欲望と告白 ―― 225
第18話　新たな仲間 ―― 238
第19話　未来への準備 ―― 251

第1話　崩壊する世界

???（主人公?）　ｓａｉｄ

朝のホームルームが終わりめんどくさい午前授業を受けて
昼飯を食い午後の授業を受けていた時だった

教師『全校生徒に連絡します。只今、校内で暴力事件が発生中です。全校生徒の皆さんは、先生の指示に従い、速やかに避難してください！繰り返しま……』

突然先生の放送に周りのみんな呆然としていた
そりゃそうだ
こっちにはガタイの良い体育教師がいるし
いざとなった俺もすぐ動くか……ーーキィィンーー……まさかな?
あれがもう日本に?
つい2日前に中東で確認されたばかりだぞ!?

教師『や、やめてくれ!!　痛い痛い痛い!!　助けてくれ！　ギャアアアアア！』

嘘、だろ?
教師の叫びを最後に不気味な静けさをだしたが
教卓のチョークが落ちた瞬間生徒たちは逃げ出した

「うあわあああああああああああああああ！」
「にげろおおおおおおおお！」

生徒たちの叫びを聞きながら俺は教室に残った
何故かって?どうせ一緒に行っても食われるか踏みつぶされるかのどちらかだしな
俺は鞄からＣｚ７５とＭ１９１１（どちらも改造品）とそれぞれマガジン４本ずつ出した
机の横にかけてる刀袋から木刀と偽って持ってきた刀１本

「2丁ともサイレンサーついてて良かった」

サイレンサーとは主に銃の発砲音を減らす役割があるが
完全に消せるわけではなく威力や射程が下がるので隠密行動向きである
教室を出るとそこは地獄だった
周りには肉片や血が飛び散っており
廊下を歩いている男子生徒は目は白目で肌は青白く腹部からは腸が垂れていた
うん死んでるな

「まぁ第2の人生終わらしてやるから感謝しろよ?」

俺はＭ１９１１の引き金を引いた

???　ｓａｉｄ　ｏｕｔ

小室（こむろ）　孝（たかし）　ｓａｉｄ

俺は今幼馴染の宮本（みやもと）　麗（れい）と井豪（いごう）　永（ひさし）と管理棟に逃げていた
さっき校門で教師達が殺し合いをはじめて
その後放送が流れたがその教師は死んだらしい
ところどころから生徒達の悲鳴や叫び声が聞こえた

永「管理棟から出るぞ！」

永の指示に従い管理棟へ向かう
途中の渡り廊下で死んでるであろう現国の教師に
麗が容赦なくモップの槍で心臓を突いたが平然と動いていた
麗と俺が驚いている間に永が教師を捕まえたが
教師は本来人間ではありえないような力で永に振り向き腕にかぶりついた
慌ててバットで殴ったが全く気にしていなかった

麗「ど、どうして？」
「死んでるんだ、死んでるのに動いてるんだ！」

教師はさらに永にかぶりつき麗が引き剥がそうとしていたが
教師は未だに永の腕から離れない

麗「ねぇ！男でしょ！なんとか……何とかしなさいよ！」
「くっ！うわあぁぁぁぁぁ!!」

そして俺は教師の……人間の頭を初めて叩き割った

小室　孝　ｓａｉｄ　ｏｕｔ

???　ｓａｉｄ

さてどうしようかな？
下は地獄だし
予備の銃は今１番危険そうな職員室だし
携帯や衛星電話は家だからないしな

あっ！
そうそう今更だけど俺の名前は神崎（かんざき）　拓真（たくま）です
ちょっと訳あり高校生です
そんなこと思いながら管理棟の渡り廊下を渡っていたら
現国の教師が目玉ポロリしたまま第２の人生を終わらせていた

（誰かにバットで潰されたな）

さっきから第２の人生を歩んでる連中に鉛玉のプレゼントを送ってあげていたら
３人の男女が階段を上へ走っていた

「あれは？小室達？何故屋上に？いや……」

下がこんな状況なら上の天文台に立て籠るのが妥当か

「ウウッ」
「ガアアァ」

後ろを見ると第2の人生を歩んでる人たちが近づいてきていた

（これはさすがにヤバイなぁ）

「小室達と籠るか」

そう思い第2の人生を歩んでる生徒達にまた鉛玉のプレゼントをしながら
後を追い屋上に出た
だがすでに生ける屍達が屋上を陣取っていた
天文台の階段を見ると女子生徒が生ける屍に槍のようなもので心臓刺していた

（あれは宮本さんの槍術か、だが……）

まぁそんなで倒れるわけないからなぁ
現に宮本さんが壁に打ちつけられてるし……

「……紅桜、刀投げていい？」

『・・・・・・・・・・』
「死なない程度によろしく」
『・・・・・・・・・・』
「ああ、ありがとうな」

ん？
誰に語りかけたかって？
この刀だよ？
ほら赤く光出したこいつは妖刀紅桜
詳細はまた今度で
そして俺は容赦なく紅桜を投げた

神崎　拓真ｓａｉｄｏｕｔ

小室　孝ｓａｉｄ

俺たちは噛まれた永を庇いながら階段を上っていた
そしたら麗がもう死んでるであろう男子生徒をの胸を刺したが
それをものともせず麗は壁に叩きつけられた

「麗！」
麗「いやあぁぁぁぁぁぁ！」

男子生徒が麗に近づき…
ーーヒュンッグチャーー
…前に何かが男子生徒の頭を貫いた

「これは……赤い刀？」

急に飛んできた刀に呆然としていたら

拓真「よっしゃー！命中！」

また急に叫び声が聞こえ振り向くと１人の男子生徒がジャンプしながら喜んでいた

「あれは？拓真か!?」

逃げて来たのか親友の拓真が全身血まみれの格好でこちらに走ってきた

こんな状況だったがかなりホラーな光景だった

小室　孝ｓａｉｄｏｕｔ

神崎　拓真ｓａｉｄ

俺は元男子生徒の頭から紅桜を抜きながら孝達の所に行った

「よう！孝！噛まれてないか？」

孝「あ、ああ大丈夫だけどお前の方はどうしたそれ？」

「あー答えたいがーーズシャッーー場所変えね？とりあえず孝バリケードになりそうな

ものを永と探してこい！」
孝「あ、ああわかった！」

にしてもほんとゾンビのみなさんは忙しそうに食べてるなぁ
あっ俺食べてもおいしくないよ少年
ーーザシュッーー
てか紅桜のご機嫌どうやって取ろうかな？

孝「拓真！早く来い！」
「おう！」

俺は天文台に引きこもり室内にあった水道で頭と腕の血を洗い流し同じくその中にあったタオルで吹き終わり
外に出たその時急に突風が吹き体が押された
振り返ると多数のヘリコプターが過ぎていった

永「あれは？ブラックホーク!?アメリカ軍か？いや違う自衛隊だ！どうして？近くに

自衛隊の基地なんかないのに…」

永がご丁寧な説明をしながらも麗が助けを求めたがヘリコプターは去っていった

「これはかなり遠くから来たな、あれは多分防衛出動じゃないな」

孝「じゃあ何だ?」

「師団長の独断だろうな」

孝「そんなことしていいのかよ!?」

「無能な首相の指示を待つよりはよっぽどマシだよ」

声を荒げながら言う孝に対して冷静に返答したが実際俺の心は焦っていた

なぜ２日前に確認された伝染病がもう日本に伝染してるのかだ

だがその考えはすぐに断ち切られた

ーーゴホゴホ、ガハッーー

突然永が血を吐き膝をついた

麗「永!」

孝「何でだよ？ちょっと噛まれただけじゃねぇか！」

２人の叫び声が交差する中永が口を開いた

永「ハァ……ハァ……映画と同じってことさ、そうだろ？拓真」

「何故俺に聞く？」

永「ゴホゴホッ、君の持っている武器はこの日本の一般の学生が持ってるのは不自然だ」

「・・・・・・・」

永「なぁ？頼みがある」

「なんだ？親友の特権で聞いてやるよ」

永「麗と孝を安全な所に連れていってくれないか？」

永は吐血しながら話していたもう長くは持たないだろう

それなのに冷静にこの２人（麗と孝）の事を考えてるなんてお前ほんとすごいよ

「わかった、任せろ」

永「ハァハァ……さ、最後に…その銃で…お…俺の頭を撃て！」

永はわかってるんだ
自分は助からないことを
横で麗達が喚いていたが俺は銃を構えた

永「す、すまない拓真」
「気にすんな、親友だろ？」

ーーパァンーー
乾いた銃声と麗の叫び声が屋上に響いていった

第2話　合流そして職員室へ！

麗「人殺し！」

1人の少女の叫び声が屋上に響いた

あっどもども神崎拓真です！

今絶賛宮本さんに罵声を食らっています

孝「おい麗！拓真はお前を助けようと……」

麗「そんなことしなくてもよかった！そうしたら私も永と死ねたのに！」

「はぁ？」

ーーパァーン！――

俺は思いっきり宮本の頬を叩いた

麗「ッ⁉何すんの⁉」

「何ってか？現実に戻してやったんだよ！」

思わず怒鳴ってしまった

それもそうだ

それじゃあ死んだこいつは……

「じゃあ永は何のためにお前を守ったんだ？何故俺にお前たちを託したと思ってる？人が命を引き換えにお前たちを守った男を裏切る気か⁉」

麗「そ、それは……」

「いいか！お前たちは生きてる！生き残った！１人の人間の犠牲のもとにな！だがな！その命を無駄にするな！生き残り続けて永の命が無駄じゃなかったって証明してみろ！」

そう叫びきると辺りには《奴ら》のうめき声がよく聞こえていた

「すまない、言い過ぎた」

麗「いいの、別に気にしてないわ」

孝「ところで拓真、この後はどうする？」

孝の言葉で我に返り考え直してみたが1つしか行く当てがなかった

「職員室に行こう、あそこならマイクロバスの鍵があったはずだしな」

孝「わかった、麗もそれでいいな？」

麗「うん」

「では行くぞ！」

そう言うと俺はバリケードを蹴り飛ばした

落ちていく《奴ら》（何となく周りの空気で）は

一部が頭をぶつけて動かなくなったがそれ以外はゆっくりと起き上がってきたが

……

「じゃあな！」

俺が全員の第2の人生を終わらせてやった

さらに来る《奴ら》に俺は恐怖や呆れではなく笑っていた
やっと剣を振るえる！やっと弾が撃てる！と……

女子高生「きゃあああああああああ!!」

急に女性の声が聞こえた

麗「職員室の方からだわ！」
「この声？まさか!?」
孝「おい！拓真待てよ！」

孝達の声を微かに聞こえたがそんなことはどうでもいい
あの声は職員室から来た！彼女のことだ何か策があるに違いない!?
廊下の角を曲がったら6体の《奴ら》と高校生の男女がいた
男子の方は小太りでいわゆるオタクみたいな男子高生と
眼鏡をかけたピンクのツインテールの女子高生がいた

「沙耶様！」

今にも襲いそうな男子教師の頭を刀で切り裂き
周りの《奴ら》も手に持っていた銃で倒していった
後から孝と宮本、３年の先輩と校医の先生がいた

沙耶「た、拓真！」
「お怪我はありませんか？沙耶様」
沙耶「大丈夫よ、ありがとう」
「いえ、お側にいず申し訳ありません」
沙耶「それはいいわ、てかその敬語と様付けやめなさい」
「……わかった、沙耶」

周りはクリアだな
ん？
あの人は？

「もしかして、毒島主将ですか？」
冴子「ん？君は!?拓真君か!?」

やっぱり剣道部主将毒島冴子先輩だ
まぁ彼女なら生き残れるわな

「ご無事で何よりです冴子先輩」
冴子「君も無事で何よりだ」

他のみんなも軽く自己紹介をすませたようだ

「それじゃあとりあえず職員室に入りましょうか」
孝「ああ、そうだな」

みんなが職員室に入るとその辺のロッカーで扉にバリケードを作った
その後みんなはテレビを見たり武器の手入れをしていた

「確かこの辺りに隠しておいたはずなんだけどな」

俺は教員が物置にしているロッカーの裏の錆び付いた金庫を見つけた

（確か……４６４９だったかな）

ロックは解除できたが錆びていたせいか開けづらかったがなんとか出せた

コータ「ん？拓真、何してって！お前それって!?」

「ああ、これか？見ての通り銃だよ」

俺が両手に持っていたのは２丁のＡＲ（アサルトライフル）だ

１つはベルギーのＦＮ社が作ったＦＮ　ＦＡＬでもう１つがイスラエル　ＩＭＩ社のＩＭＩ　Ｇａｌｉｌ（ガリル）だ

「平野、ちょっとは落ち着けって」

コータ「おおお落ち着いてるよ？」

めちゃくちゃ動揺してるじゃねぇか！

コータ「それより拓真これはいつからここに？」
「ああ高１の夏休みからかな」
コータ「え!?なんで？」
「そりゃあ、敵襲に備えてかな」
コータ「君は一体何者なんだい？」
「今は答えれないが敵ではないな」

味方かどうかはこの後次第だがな
それよりさっき見つけたマイクロバスはまだ残ってるし
ここに残ってるメンバー以外の人達も残ってるかもしれないって事も考えなきゃならない
さっきからテレビのニュースにみんな唖然としているが
あれぐらいは通常の範疇だ、問題はこれからだ

「平野……いやコータ、この銃を持っていろ」
コータ「拓真、それって!?Ｍ１９１１じゃないか！いいのかい？」

「ああ、お前の実力は俺が知っているからな」
コータ「ん？僕君に射撃してる所見せたっけ？」

やばっ！
昔平野がブラックウォーターで射撃を教わってる時に部下と射撃練習中に見たなんて言えるわけがない!?

「そ、それより冴子先輩これを……」
冴子「？ッ!?拓真君これをどこで？」

それは持ち手から剣先まで真っ赤に染まった刀、妖刀『紅桜』だ
これは切った相手の血を吸い刀身が赤く染まり切れ味が増すと言われている物だ
ちなみに今のところ俺とだけ会話ができる

「我が家に保管されてる内の一刀です使ってください」
冴子「しかし、このようなものを私が使ってもいいのだろうか？」
「俺はあなたの過去も全て知っています、それでも俺はあなたにその刀を持ってほしい

んです」

冴子「……わかった、預かり受けよう」

そうして冴子が何度か素振りをして鞘に戻した

冴子「それでこれからどうするのだ？拓真君」

「なぜ自分に？」

冴子「この場であのニュースを見ずに冷静に状況を判断している君なら何かあるのではないかと思ったのだが……」

「……ありますが、冴子先輩鋭すぎますよ」

冴子「昔から君と共にいたのだ、わからないわけがないだろう？」

やっぱり敵わないなこの人には……

「作戦はあります、駐車場に止まっているマイクロバスで脱出しますルートはさっきの扉を出て外回りの階段を使い下へ、そこから正面玄関から外にでますできるだけ音は出さずにです、奴らには視覚と嗅覚、味覚はありません触覚と聴覚だけですから音を出さ

ず、ぶつからなければ問題ありません、当然噛まれた場合逃げても意味がないので殺すか見捨てるしかありません、後腕の筋力が異常に強化されています、燃やせば個体によりますが早ければすぐに倒せます、急所はやはり頭しかありません」

沙耶「拓真、あんた《奴ら》の事どこまで知っているの？」

「今言ったことがほぼ全部だが今それ以外は答えられない、ただ信じてくれとしか言えない」

この場の全員が拓真に視線を集めた

孝「俺は信じるぜ、拓真」

「孝……」

冴子「私も君を信じるよ」

「冴子先輩」

コータ「僕も拓真を信じるよ」

「コータ」

他のみんなが一様に頷く中沙耶だけが微動だにしなかった

「沙耶？」
沙耶「あんたは昔から隠し事ばかりだったけど嘘はつかなかったわ、だから落ち着いたら話してくれるわね？」
「ああ、落ち着いたら話す」
沙耶「そう、ならいいわ！信じてあげる！」
「……ありがとう」

そうして俺達は地獄へ向かう扉の前に立った

第3話　外道と一時の安息と少女達

どうも、神崎拓真です現在絶賛《奴ら》と障害物競争を行っています！

孝「走れ！とにかく走れ！」

孝が正面ホールで叫んだ

周りには1人の馬鹿（生徒）によって音が鳴り集まってきた亡者達だ

事の発端は職員室を出てから《奴ら》に襲われている数人の男女を助けた後正面ホールにいる奴らを俺と孝が誘導（その辺に落ちてたシューズを投げて）してみんなを外に出していたら1人の男子生徒の持っていたさすまたが手すりにぶつかり、音が響き今に至る

孝「拓真！これも計画の内か！」

「そんなわけあるか！いいからとっと走れ！」

孝とそんな言い争いをしながら俺達はマイクロバスの扉まで来た

「先生！キーを！」

静香「ええ！ってええ!?これ私のと全然違う！」

もうなんでもいいから早くして！

「孝は扉を確保、コータは窓から援護射撃、冴子先輩と俺で遊撃、他はバスの中へ！」

孝「了解！」

冴子「心得た！」

コータ「射線確保！援護射撃開始！」

「いいから！早く撃てよ！」

なんかコントみたいな緊張感がないなぁ、俺だけかな？

そんなこと思いながら生徒達の首を両断したり縦に真っ二つにしていった

静香「いいわよ！」

「了解！冴子先輩撤収です！」

そう言いながら俺達はバス乗りこんで最後に孝が閉めようとした時だった

先生「……くれ！」

「ん？」

声のした方を見ると1人の教師と複数の生徒が見えた

冴子「あれは……3年の紫藤だな」

冴子先輩が教師の名前を言ったがよく聞こえなかった

呼び捨てにしてる時点でかなりめんどくさい教師なのはわかる

しかし一緒についてきている生徒は無関係だからな

そう簡単には見捨てれないな

孝「もう少し待ってください！」

静香「このままじゃ出れなくなるわよ！」
孝「引き飛ばせばいいじゃないですか！」

阿保か！
そんなことしたらこのバスじゃ持たないだろうし、周りの《奴ら》も予想より集まってきてる

「コータ！援護しろ！俺が活路を開ける！」
冴子「私も付き合おう！」
「いえ、先輩はここで彼らを助けてください」
冴子「しかし、宮本君のあれは……」
「わかっています、しかしここで助けられる人間を助けないのは日本人の俺としては見過ごせません！」
冴子「……わかった、気をつけるんだぞ」
「はい！コータ援護頼む！」

コータの返答を聞きながら俺は車外へ出て《奴ら》を倒す

さっきこっちに来ていた生徒達と教師が乗るのを確認したが《奴ら》に囲まれて身動きが取れなくなっていた

孝「拓真！早く帰ってこい！」

「すまない！俺は戻れそうにない！後で追いつくから先に行け！」

扉越しから孝が叫んでいたが冴子が抑えて扉を閉めた

コータが窓から俺を援護しようとしていたが俺はそれを手で制した

「コータ！俺の武器を頼む！その中には人に渡ってはいけない物もある！頼むぞ！」

コータ「……くっ！わかった！任せてくれ！」

そう言いながらコータは窓を閉め

それと同時に保険医の鞠川校医がバスを急発進した

一瞬すれ違いざまに「ごめんなさい」と言われた気がしたが

俺は気にせず笑顔で返しながらバスを見送った

「さて、こっからどうしようかな？」

周りは《奴ら》だらけ何もせず通り抜けるのは不可能

まぁいけるけどね

「明音！ロングレンジサポート開始！」

明音「ヤー」

俺の叫びに呼応して複数の鉛玉が俺の周りの《奴ら》の脳を吹き飛ばした

発射された方を見ると２人の少女達がこちらに来ていた

「無事か？明音（あかね）・メアリー」

明音「ええ、拓真も無事そうね」

「ああ、まぁな」

メアリー「先輩、これからどうしますか？」

「とりあえず、俺のコテージで武器・弾薬・食料・通信機の回収だ、後現時刻を持って緊急事態に付き部隊の権限及び火器自由を宣言する」

明音「それ言うの遅くないですか？隊長」
「あっそういうのは気にしなくていいから、メアリー武器は何を持ってきた？」
メアリー「はい、自分は調理室の近くにいたのでその辺りにある隠し武器庫からハンドガンを2丁と明音さんがスナイパーライフルとアサルトライフル最後にロケットランチャーを持ってきました」

彼女達の装備内容を聞きながら俺は近場に止めていたワゴン（校舎移動中に頭を吹き飛ばした教師が持っていた）に乗った
今更だがこの2人は光城（こうじょう）明音（あかね）とメアリー・ドレイクだ
彼女達は俺同様とある組織に所属しており基本はこの学校で普通の高校生活を送っているが休みの日や緊急の案件が来れば戦闘に参加できるように常に準備はできるようにはしているのだ

明音「で？この後はどうされるのですか？隊長」
「とりあえず孝達と合流だ、さっきから盗聴器で聞いているがあまりよろしい空気ではないからな」
明音「了解しました、ところで交戦規定はありますか？」

「生ける屍は皆殺し、助けれる非戦闘員並びに民間人の保護、なお武装しこちらに攻撃してきたり妨害してくる者は敵性因子と判断射殺せよ」

明音・メアリー「了解!!」

俺たちはワゴン車に乗り俺が運転席に明音は助手席にメアリーは真ん中に乗らせる

そして車を走らせながらメアリーに屋根をカットしてもらうように頼み

明音には周辺警戒をしてもらっていた

桜並木の道路を抜けて見えた光景はまさに地獄の黙示録のようだった

あちこちで煙が上がりサイレンが鳴り響き銃声がちらほらと聞こえていた

明音「ひどい、こんなことが……？」

メアリー「隊長１つよろしいですか？」

明音は呆然としていたがメアリーだけ平然な顔で何か気になったのだろう俺に聞いてきた

「なんだ？」

メアリー「これは誰の仕業ですか?」
「不明だ、俺の知り合いの情報屋の話では3日前に中東のゲリラの基地で目撃情報を確認していた、これを米軍が爆撃して事実上なかったことにされていたがまさかここまでウイルスが来るとは思ってなかったよ」
メアリー「では、米軍の仕業ではありませんか?それなら証拠隠滅を理由にすれば話が通りますが……」
「これは少し私情を挟むがその可能性はないに等しいかもしれない」
メアリー「どうしてですか?」
「今の大統領とは支部長との旧知の中でね、特に生物兵器を忌み嫌う人だったそんな人が敵地に使うだろうか?使うとして何故米軍は把握していなかったのか」
メアリー「米軍が把握していないとなぜわかるんですか?」
「これも憶測になってしまうがさっき職員室のテレビを見た時ホワイトハウス離脱したのはこの惨事が起きてからだ、前では無くね」
メアリー「なるほど、そういうことですね!わかりました!」
「納得したところでメアリー屋根は空いた?」
メアリー「はい、切り取れましたよ」
「よし明音、運転交代だメアリーは俺の援護を俺は屋根から彼ら(孝達)を探すよ、一応念のため

ロケランとアサルトを頂戴」
メアリー「了解しました」

そうして今明音が運転席でメアリーが真ん中の席で補佐
俺が天井から身を乗り出して周りを見た
周りに漂う死臭に嫌気をさせられながらも前を走っているだろうマイクロバスを探すと交差点で急停車していた
俺たちは近づき車を降りると宮本が助手席から飛び降りてきた

「宮本！どうした！こんなところで降りたら危険だろ!!」
麗「神崎君!?生きてたの!?」
「人を勝手に殺すな！だいたいの事情は知っているが一旦中に戻れ！ここは危険……」
「隊長右より暴走車！」……!?」

言われた方を向くと１台の市バスがこちらに突っ込んできていた
俺は咄嗟に宮本を俺の後ろに突き飛ばし持っていたロケランで市バスに向けて発射した

発射する直前に見えた運転手の絶望の顔を俺は忘れないだろうなと思っいながら躊躇いなく放たれたロケットはバス正面に命中交差点手前で横転した

「ここは危険だ！宮本早く車内に戻れ！」

麗「いやよ！誰があんな奴なんかと一緒にいなきゃいけないの!?」

「だったら俺があいつを黙らすから頼む！乗ってくれ！俺と一緒に！」

麗「ッ!?」

メアリー「なんか隊長フラグ立ててません？」

メアリーは一体何を言っているんだ？

心なしか宮本の顔が赤い気がするが……

明音「隊長！バスより敵です！燃えながら来ます！」

「チッメアリー！持ってきた武器をバスに詰め込め！明音はそれを援護！邪魔なら中の連中を黙らせろ！俺がここを抑える！」

明音・メアリー「了解!!」

コータ「僕も右の窓から援護する！」

「頼んだぞ！コータ！」
コータ「任せとけ！」
麗「私も手伝う！」
「宮本はメアリーを伝だってやってくれあれかなり重いんだ、その後は助手席に座っていてくれ」
麗「……わかったわでも！今回はちゃんと戻ってきてよ！」
「ああ、当たり前だ！」

そう言いながら俺は刀を抜き燃えかけの《奴ら》の頭を切り落とし
ハンドガンでまだ燃えてる方の頭を打ち抜く
元々個体差はあるが火には弱いのでただの作業と化しているがそこは気にしてはいけないのだろう
すると明音が最後にバスに乗り込んだのを確認して俺は車内に入った
そこには先ほど助けた教師と生徒たちがいた

??「これはこれは神崎君ではありませんか？」
「表向きで関わるのは初めましてですね、紫藤先生」

紫藤「その言い方は誤解を生むのでやめていただきたいですね、私は公平に審査したまでなのですから」
「よく言うぜ、父親の飼い犬が」
紫藤「……それよりもその武器を私に渡していただけますか？」
「何故ですか？」
紫藤「君のような生徒が持つべき物ではないですからね、私のように秩序のある大人が管理しなければならないのです」
「大人ねぇ、汚職したクソ野郎の間違いではありませんか？」
紫藤「心外にもほどがあります、私はただの一大人、一教師に過ぎないのですしかも生徒に模範となれるようにね」
不良「ゴタゴタ言ってねぇで紫藤先生にそれをさっさと渡しやがれ！」
「黙れ雑魚、貴様に聞いてない引っ込んでろ」
不良「なんだと!?てめぇ！ふざけやがって！」

短気な馬鹿が殴りかかってきたがカウンター技でバスの後方に逆戻りした

「1つ言い忘れがありました、紫藤先生これはとある組織の武器なんですよ、私達は今特

別な案件に付きこれ[銃]の使用を許されています、つまりです紫藤先生……大人しく座っていてください、頭に風穴を開けられたくなければ静かにしていてください」

いつの間にか動き出していたバスの中で俺は孝たち以外に向けてガリルを構えた

さすがに危険と思ったのか紫藤と不良は座席に座った

まだ１日目も終わっていないのにこの疲労はなんだろうと俺は暗闇の空を見上げた

まだ地獄は始まったばかりなのだなと思いながら……

第４話　ひと時の平和と拓真の正体

どうも、神崎拓真です
今俺とメアリーと明音で交代で紫藤たちを監視しながら夜が明けた
周りを見ると渋滞で一向に動かない車
恐怖と混乱に慌てふためく民間人とそれを必死に抑えようとしている警官
結論から言うと全く動かないのだ
それはまぁ当然と言えば当然であった
現在市内の橋は完全封鎖中で洋上空港への規制はだいぶ前まであっただろうが今は封鎖されているだろうし
さっきから後ろで紫藤先生が何か言ってるし軽くいやかなりうっとしいしそろそろ潮時だな

メアリー「隊長、あいつ黙らせますか？」
「いやいい、それよりこれからの事を考えるぞ、沙耶」
沙耶「拓真？何？何か案がありそうに見えるけど」

「ああ、この近くに俺が使っているコテージがある、塀もあるし見晴らしもいい今から出たら夕方になる前にはつけるはずだ」
沙耶「それは別に構わないけど、あなたがとある組織にいるって話どういう事？それに表向きって？」
「沙耶、詳しいことはコテージに着いたら話すよ」
沙耶「わかったわ、みんなもいいわね？」

周りを見るとさっきからいたようでみんな出る準備ができていた
俺は右手に持っていたハンドガンで紫藤に向けながら呼んだ

「紫藤」
紫藤「神崎君、教師に向かって呼び捨てはいけないですね、それにどうしましたか？皆さん揃って」
「もう学校という組織が崩壊した今お前を先生と呼ぶ理由がないから、それから俺たちはここでさよならさせてもらいます」
紫藤「ほほう、それはどうぞご自由に、何せ日本は自由な国ですからね、しかし鞠川校医だけは連れていかれるのは困りますね」

「だから？」
紫藤「え？」
「鞠川先生はご自分の意志でこちら側に来た、ただそれだけだお前に信用できる価値あったのなら先生がそちらに行ったかもしれないが彼女はこちら側を選んだ、お前に止められる理由がない、それとも今度こそ風穴開けられたいか？」
紫藤「・・・・・・・・・」

俺は紫藤を見ながらみんなと共にバスを降りる
降りる直前に見えたのは紫藤の憎悪の顔だった
それから俺達は意外と平和にコテージの前に来た
そこで駐車場を見たコータが目を丸くして腰を抜かしていた

コータ「こ、これは!?ハンビー！しかも２台も!?」
静香「あれー？もしかして拓真君リカと知り合い？」
「知ってるも何も隣人ですが……」
静香「やっぱり！でもでも～ときどき私が掃除しに来た時一度も会ったことがないよね？」

「ええ、仕事でよく外出していたので」

まさか海外に仕事に行ってる時に鞠川校医がリカの部屋を掃除にきてたなんて知らなかったよ

そう思っているとメアリーが後ろから近づいて来た

メアリー「隊長、あれを」

「ああ、わかっている明音とメアリーは後方にて周辺索敵、他はついてこい」

明音・メアリー「了解」

孝「わかった」

冴子「互いをフォローすることを忘れるな」

「行くぞ！」

俺は中にいる《奴ら》を潰すため門を開け突撃していった

昨日の朝までミリタリーについて熱く語っていた大学生の兄さんや

いつも笑顔を振りまいていたバカップルさを出していた夫婦でさえ今はただの物になり果てた

既にここには楽しかった隣人たちではなく俺達を襲おうとする化け物になっている
だからせめて隣人として介錯をしてやる
心の中で合掌しながら俺は刀を振り落とした
わずか数分で制圧させた孝達を見ると平和な日本では見れない戦争の生き残りの顔していた
もうこの時点で彼らは変わってしまっていたのだ
この後もし世界は平和になっても彼らは普通の生活にはもう戻れないだろう
そう思いながら彼らにはリカの部屋の方に通して俺とメアリー、明音は俺の部屋に入った
別にいかがわしい事をするわけではない
もちろん彼女達は魅力的な女性だが今はそれどころではないのだ

「メアリー俺の部屋にある弾薬箱に空のマガジンに弾込めしといてくれ」
メアリー「はい、隊長」
「メアリー、できれば隊長より先輩と普段通りで頼む、なんかなれなくてな」
メアリー「……わ、わかりました先輩」
「ッ!?……そ、それと明音もだ、部隊と合流するまではいつも通りでいいぞ、そ

れと武器の整備と袋への積み込みを頼む、メアリーは込めたマガジンを袋へ俺は無線機で指令部と連絡を取ってみるよ」

メアリー・明音「わかりました先輩」「わかったわ拓真」

一瞬メアリーが可愛かったのは仕方がない事だと明記しておく

こっちの方がいいなとか思いながら俺は自分の私室にある無線機の電源を入れた

これは衛星経由で話す衛星電話なので衛星が潰されてなければ使えるはずなのだ

俺は司令部が普段使っている無線の周波数に合わせて話してみた

「こちら国連軍対バイオテロ対策部隊隊長の神崎拓真だ、誰か応答できる者はいるか?」

??『ザザザザ……こちら極東方面軍司令部、隊長!ご無事でしたか!』

「その声はネイサン中佐か?」

ネイサン『はい!現在司令部では非常事態宣言を発令に基づき基地司令の指揮のもと平穏が保たれています』

（※ネイサン中佐は私の部下なのだが詳しい話はまた追々）

「そうか、今の世界の状況はわかるか？できれば総司令部の意向が知りたい」
　ネイサン『残念ながら総司令部のあるアメリカでは音信が途絶、現在敵勢力の排除が大方終わりつつあるイギリスに総司令部機能を移譲現在集計中です』
「了解した、そちらから部隊をこちらに展開できるか？」
　ネイサン『ハッ！現在極東軍所属の空母と随伴護衛艦が床主湾近海に接近中です、現在床主空港を前線基地として運用するため現在制圧作戦の検討中であります我々の部隊も全員出動がかかりました』
「できれば明日までに部隊を1個中隊派遣できないか？」
　ネイサン『明日までなら空母にいる部隊を出せばいけると思いますが場所は決まっているのですか？』
「ああ、到着次第ビーコンを打つが一応座標も送っておく、その時先遣隊で1個中隊、民間人がいる可能性を考慮に入れ後詰めに輸送ヘリと護衛の攻撃ヘリを頼む」
　ネイサン『わかりました後詰めの部隊は空港制圧後向かわせます』
「すまない、制圧が完了次第知らせてくれ」
　ネイサン『了解しました、ではいつでも受信できるよう無線機の電源はつけておいてください、作戦が終わり次第自分もそちらに向かいますので隊長、ご武運を』

それを最後に通信を切るとこの無線機についているダイヤルボタンを押しとある人に電話をかけた

??『はい、もしもしどなたですか?』

「お元気そうで何よりです奥様」

百合子『その声は!?拓真君ですか?』

この方は沙耶の母親で高城家総帥高城（たかぎ）壮一郎（そういちろう）氏の奥様高城（たかぎ）百合子（ゆりこ）さんだ

「はい!奥様、沙耶様も無事です」

百合子『そうですか、ありがとう護衛の任を続けてくれて』

「いえ、それより奥様現在の屋敷の現状は?」

百合子『今は壮一郎さんと共に屋敷の守りを固め終わった所です、そちらはどうですか?』

「はい、現在御別川対岸の俺の家に立てこもっています、明日にはそちらに向かうでしょう」

百合子『わかりました、ところであなたそのためだけに電話しに来たわけではありま

せんね？』
「奥様には敵いません」
百合子『あなたなら何か策を持っている気がしただけですよ』
「おっしゃる通りです、明日より国連所属の特殊部隊が1個中隊が俺の要請できます。その後、多数の輸送ヘリと支援の攻撃ヘリが来ます」
百合子『それは本当ですか？』
「はい、さすがに輸送ヘリに関してはまだ少し時間がかかりますが……」
百合子『いえ、それでも十分です』
「ありがとうございます、ではまた明日に」
百合子『ええ、待っています』

その言葉を最後に奥様との通信が切れた
俺は安堵のため息を吐きながら後ろを振り向くと明音が立っていた

「どうした明音？」
明音「高城さんに実家のこと話さないの？」
「その前に俺達の正体を明かさないと」

明音「でもそれはリスクが高すぎる！世界が元通りになったら彼らは国連の監視下に置かれるそうなれば……」
「その時は俺達が見ればいい、それに世界が元通りになるまでに少なくとも５年はかかるその頃には彼らも大人だ何とかなるだろう」
明音「でも！」
「明音、俺は皆を裏切りたくないあいつらは俺の友人達の唯一の生き残りだ、彼らの戦闘力は明音も見ただろう？彼らならこの危機を乗り切れるしこのまま黙っているよりいいと思うんだ」
明音「……はぁ、それは友人として？それとも高城家家臣として？国連の一職員として？」
「友人としてだ、仕えるものとしてでも仕事でもなくだ」
明音「わかったわ、じゃあ私は残りの作業を終わらせとくからあなたは隣に早く行きなさい」
「ああ、ありがとう明音」

明音に見送られながら彼らの所に向かった
入ると丁度みんなが集まっていたらしく全員が俺を見た

沙耶「拓真！その様子だと話してくれるのね？」
「ああ、沙耶他の皆も今から話す事はこれから君たち全員を縛るものになる、もしかしたら普通の生活には戻れなくなるかもしてない、それが嫌なら2階に上がってくれ」
冴子「私は聞こう、そのためにここで待っていたのだからな」
孝「俺もだ、拓真には借りがあるしな」
コータ「僕も残るよ」
麗「私も！」
静香「別に気にしないわよー」
沙耶「当り前じゃない何年の付き合いだと思ってるのよ！」
「みんな……ありがとう、俺は国連軍対バイオテロ対策部門の人間だ」
沙耶「それがあなたが言っていた組織の事？」
「ああ、一応俺と明音、メアリーだけはまだ高校生だから学校に通いながらだったがな、部隊は主に多国籍だが全員国籍は抹消されているし基本俺達がいる極東軍の基地からの外出はできない」
冴子「その極東軍というのは何かね？」
「俺達国連軍は対バイオテロ以外にも工作部隊や監視部隊もいる、世界中の国を監視す

るには基地が足りないから我々は複数の無人島や島に基地を作り支部を置いた、俺達がいるのは硫黄島にある極東方面軍司令部というわけだ」

孝「それで？今世界はどうなっているんだ？」

「英国以外は無政府状態だアメリカは大統領の飛行機搭乗の報を最後に総司令部とは音信途絶、英国は現在南部の制圧が完了現在中部を制圧中、その他の国に関しては一切報告が上がらない」

沙耶「そう……わかったわ！で？これからの方針はどうするつもりなの？」

「高城邸に向かう、俺の要請で１個中隊ほど援軍が来る予定だ」

冴子「では、それまではここで朝を越そうか」

沙耶「ええ、そうね」

「何も思わないのか？」

沙耶「ないわけではないけどやっとあなたが話してくれたのよ？今はそれだけで十分よ！」

孝「だな！こんな心強いやつ中々いないよ」

コータ「だね！今度射撃を見てみたいよ」

麗「そうね！これならパパとママも助かるわね！」

冴子「うむ！これでまた君の事が知れたよ」

全くこいつらは相変わらずすげぇ奴らだよ
こんな地獄が始まって数少ない平和のひと時を今送っているかもしれない
俺はそう思いながら外から聞こえる現実を今だけ逸らしたのだった
それがさらなる絶望を生むとは知らず……

第５話　その頃……

・床主湾洋上・国連軍極東方面軍所属空母艦上・日本遠征第２大隊隊長ｓｉｄｅ

俺は今艦上のデッキで床主市の周りを双眼鏡で見ていたが
死体、死体、死体、死体どこもかしこも生ける屍だらけで生存は絶望的だろう
だがそんな中極東支部からの要請でとある場所に援軍に向かうことになった
総隊長殿が現在床主市で生存者と共に脱出中これを援護せよとの事だった
行くのは俺が率いる第２大隊だ
他の大隊達は床主国際洋上空港に向かう
何でもそこを拠点とし生存者の避難所と補給基地とするらしい
周りを見渡しながら考えていると副官が来てヘリの用意ができた事を伝えに来てくれた
俺は了承し先に行かせると最後に街の方を見てすぐに副官が来た方向に歩き出した

ｓｉｄｅｏｕｔ

・床主国際空港内・南(みなみ)リカｓｉｄｅ

ここは洋上空港となっているため橋はなく連絡船で来ることしかできない場所だ
だが今やここも血肉と恐怖の地獄と化していた
ここには要人や俳優、空港技術者にその家族がいたのだがその中の誰かがなったらしいのだ
おかげで空港の中は地獄と化しＳＡＴの私達が応戦したが今や飛行機１機飛ばすのがやっとな状態なのだ

「嫌なニヤけ面ね」
田島「床主市に公演に来てた俳優だよ、元だがな」
「ええ、そうね」
田島「左右の風はほぼ無風、修正の必要なし、射撃許可確認した」

相方の声を聞いて私は引き金を引き元俳優の頭を打ち抜き次の元人間の頭を次々撃

ち抜いていった
大方撃ち尽くし周りを見渡すと奴らの姿はなく
ただの死体になっていた

田島「お見事！奴らは全滅した！」
「ふーーーーー」
田島「何やってんだ？」
「朝から寝ころびっぱなしなのよ？疲れちゃったわ」
田島「何なら俺が揉んでやろうか？」

射撃体勢から起き上がり防弾チョッキの下から自分の胸をマッサージしていたら
私の相方の田島が冗談を言ってきた

「私より射撃がうまくなったらね」
田島「それは無理だな警察内でベスト５に入るお前にか？無理だな」
「ならあきらめて」
田島「日本でお前以上の実力者そんな近くにいないだろ？」

「いたわよ?お隣さんに私以上の射撃力を持っている高校生が」
田島「マジかよ!?世の中には結構ヤバいやつがいたもんだ」
「まぁ彼はある意味でもヤバいやつだったわ」

彼の素性を調べたら署長に止められたからね
まぁ彼の事だから生き延びてるでしょうけど
それに彼、確か藤見学園の制服を着ていたわね
静香も確かあそこで講師でやってたはず、ついででもいいから助けてくれたらいいのだけど……

ｓｉｄｅｏｕｔ

国連軍極東方面軍基地・ネイサン・グレイ中佐ｓｉｄｅ

私は今安堵していた
先ほどの通信で基地司令の指示でと言ったが実際は大統領専用機から無線機で指示

を飛ばしていただけなので
もし司令に何かあればこの基地の維持は厳しいだろう
その前に彼を早く連れ帰らなければ！

「各大隊の準備は整ったか？」
兵士「はい！現在各ヘリに搭乗、近海に移動用の空母も待機させています！ご指示があればいつでもいけます！」
「よろしい、では今すぐに向かうぞ！」
兵士「はっ！了解しました！」

私は愛用の小銃を持ち部下たちと共に硫黄島を後にした
だが終始気になっていたこの嫌な予感は果たして何なのか
今の私にはわからなかった……

ｓｉｄｅｏｕｔ

床主市高城邸・高城百合子ｓｉｄｅ

私達は今この地獄が始まってから周りの防備を固め
助けれる人達をできるだけ助けて今に至るのだが
一部の人たちは現実を見ておらずわけのわからないことを言う始末
そんな中彼……拓真君から電話が来た時は正直驚いたが
彼なら大丈夫だろうし沙耶の安否を確認を取れたことがうれしかった
さらに救助と援軍まで呼んだのだから驚きを飛び越えて呆れてしまっていた
彼の正体は知っていたがまさかここまで対応できるとは思っていなかったからだ
私はこの事を壮一郎さんに報告するため屋敷の畳のある部屋に入った

「壮一郎さん」
壮一郎「なんだ？百合子、何かあったのか？」
「はい、拓真君から先ほど連絡がありました」
壮一郎「拓真？神崎の所か？」
「はい、彼の話では沙耶は無事学園を脱出しこちらに向かっているとの事」
壮一郎「……そうか」

他の人にはわからないだろうけど私にはわかる
壮一郎さんは娘の沙耶の事この地獄が始まってからずっと心配していたのだ
表に出さずとも私にはわかる
今壮一郎さんの顔に微笑みが見えている
おそらく安堵したのでしょう

「それからこちらに援軍と救助の部隊が来るそうです」
壮一郎「それは真か？」
「はい、彼いわく援軍は明日に、救助はもうしばらく時間がかかるそうです」
壮一郎「そうか、だが救助が来るのなら何も焦ることはあるまい」
「そうですね、それにしても拓真君はよくここまでできたものです」
壮一郎「うむ、立派な男になったものよ、さすが我が家臣の１人だ」
「今は沙耶の護衛も務めてるでしょ？」
壮一郎「それもあるがあやつは懐はかなり深い、私でさえ見抜くのが困難なものだ」

壮一郎さんがそこまで言わせるほどまで成長した拓真にうれしくも思うが

それと同時に何か嫌な予感が過っていた
けど、原因がわからないからそのままにした
それがこの地獄がさらに地獄になるとは思いも知らず

ｓｉｄｅｏｕｔ

アメリカ合衆国上空・大統領専用機・極東方面軍司令ｓｉｄｅ

俺がこの機にいるのは偶々だった
大統領になった友人と食事をしている時にこの惨事が起きた
俺達は命からがらこの機に乗り込み脱出したが
祖国であるアメリカは今や地獄と化していた
私は急ぎ極東方面軍司令部に繋ぎネイサン中佐達に基地を任せさせた
本当なら神崎准将に任せたかったが彼はまだ高校生で日本にいたはずだ
今頃この地獄で何か策を考えているに違いない
私はそんなことを考えながらふと手洗い場で何か作業をしている男性がいた

「君何かあったのかね？」
職員「ええ、ファーストレディの体調が悪いらしく今タオルをと思いまして」
「そうか、何かあったら呼んでくれできる限り力を貸そう」
職員「ありがとうございます！では……」

そう言いつつ彼は部屋に戻っていった、それが彼の最後の生きた顔とは知らず
……

ｓｉｄｅｏｕｔ

床主市コテージ神崎拓真の部屋・光城　明音ｓｉｄｅ

あの地獄が始まった時私は教室にいた
皆が逃げまとう中
私は教室に隠していたスナイパーライフル[S][R]とアサルトライフル[A][R]を持ち教室を出ると

そこにはクラスメイトの友人が腸を食われながらこっちを見ていた
まだ生きているらしいが
化け物に食われ続けているせいで痛覚が麻痺しているのか痛みはなさそうで食われるたびにビクンッビクンッと痙攣していた
ただ目だけはこちらを見ていて唇を動かしていた
それは『助けて』なのか『殺して』なのかわからなかったが
あれ(化け物)に噛まれてはもう生きていけないだろう
私はARの銃口を向けて引き金を引いた
最後に見えたのは銃口から見える閃光と共に微笑んで見えた友人の顔だった
あれから拓真……隊長と出会って紫藤達を脅s……座らせて
今は彼が使っているコテージまで来ているわけなのだが
拓真（結局名前で呼んでと言われた）はいつも未来の事を考えていて
射撃力や武術、体術まであるある意味チートだなぁと思ったりするのだが
そこがいいとか思っていたりする
前までは私とメアリーとの秘密だったのに今は皆に知られている
ちょっぴりさみしい気もするけど
今1番警戒すべきは宮本さんに高城さん、毒島先輩だろう

今の拓真はそれどころではないだろうし
でもでも！もしかしたらって考えると……

「どうしよう……はぁ」
メアリー「明音先輩途中から心の声がもれてますよ」
「え……」
メアリー「それに私も拓真先輩の事狙ってるんですからね？」

メアリー……恐ろしい子！ってこんな地獄なのに何をやっているんだろう
私は……

ｓｉｄｅｏｕｔ

第6話　短き休息と希里親子

こんばんはみなさん！神崎拓真です！
現在バスを捨てコテージに着き正体を明かした後夜を迎えた所ですが……
女性『このいわゆる〝殺人病〟のあまりにも急速な蔓延について……』
現在俺の部屋とリカの部屋の一部の壁をくり抜き通路にした後
麗（下で呼べと言われた）、冴子さん、沙耶、静香先生（麗同様）はリカの風呂場で明音とメアリーは俺の風呂場でそれぞれ入っている一方男子組はというと……
孝「楽しそうだなぁ」
コータ「セオリー守って覗きに行く？」
孝「俺はまだ死にたくない」
リカの武器ロッカーを漁っていた

すでに片方は開けており、弾薬箱があったらしく残りの武器が入っているであろう方の扉を開けようとしていた
ちなみに俺は自分の武器をあらかた確認した後携帯ラジオを聞いていた

女性『……はこの時間を持って終了いたしますみなさん、さようならそして……幸運を!!』
「幸運、か、果たして今の世界に幸運なんてあるのだろうか?」
孝「拓真、すまん手を貸してくれ!これ結構弾込めるの難しくてよ」
コータ「仕方ないよ小室は１度も弾込めしたことないんだから」

そこには一般の警官所持していいレベルじゃない銃があった
スプリングフィールドＭ１Ａ１　スーパーマッチやＡＲ―２５改造品やイサカＭ３７、クロスボウがあった
そこに孝とコータが７．６２ｍｍを弾倉に入れていた俺も座り弾込めを始めながら会話した
「リカは一体何人誑し込んだらこんな風に武器が集めれるんだ?」

孝「警官ならなんでもありかよ？」

コータ「普通の人ではないのは確かだね、未婚の警官って本来なら寮に住まなければならないのにこんな部屋を借りてるなんて実家が金持ちかあるいは付き合ってる男が金持ちか汚職してるか」

「リカに限って汚職はないな、付き合っている彼氏がいたかわからないが彼女アメリカの射撃大会で優勝していたからな、おそらくそこが資金源だ」

コータ「なるほどって拓真もう弾込め終わったの!?」

「ん？ああまぁね……ッ!?」

孝「どうした？」

「いや、俺は自分の部屋の弾込めでもしようかね」

そこには弾の入った弾倉と空箱があり作業を終えた俺は背後の脅威から逃れるため立ち上がろうとしたが手遅れだったらしい

背後から来る核弾頭級の持ち主から……

静香「た～く～ま～く～ん♡」

「ッ／／静香先生！……この匂いお酒飲みましたね？」

静香「ちょっとだけよ～あ！小室くーん！」
孝「うわああぁぁぁ、せ、先生大声は出さないでください、下へ行ってください」
静香「えーしずかお外こわいからいやー！あ！コータちゃーん」
コータ「ちゃん？あの、えと、あは、ぶはぁッ!?」

次々静香先生の餌食になったが最後のコータに関しては頬にキスされて鼻血が出ていた
メディーーーーーク!!!
……とりあえず酔ってる静香先生を俺が運ぶことになり
孝にはコータの止血と監視を頼んだ
いざ静香先生を背負うと背中に核弾頭級の柔らかさとぬくもりを感じ慌てて素数を数え次に支えるためお尻を触るわけだが……仕事モードでなんとか……するしかない！

静香「お尻にに触ってるぅ拓真くんのえっちぃ」
「本当にそういう理由で触れたらどれだけ幸せだと……」
麗「何が幸せだって？」

「れ、麗!?これは、その……」
麗「……あー! 拓真が3人いるー」
「はいい?」

やばい麗のやつも酔ってる
とりあえず今は静香先生を寝かせないと……すまん麗
そう心で謝罪しつつ静香先生を敷布団の上に寝かせ布団をかぶせ無防備な沙耶を見て見ぬふり（メッチャガン見）をしてキッチンで料理している冴子さんの所に向かった

冴子「拓真君か、もうすぐ夜食ができる明日の弁当もな」
「助かります冴子さ……ん?あの、その恰好は?」
冴子「ああ、これか合うサイズのものがなくてな、洗濯が終わるまでごまかしているだけだが……はしたなさ過ぎたようだな、すまない」
「い、いえそんなことは……」

目の前に広がる楽え……じゃなくて下着エプロン姿にさすがに俺でも……グっジョブ冴子さん!

生きてて良かったよ！
うんマジで！っとそんなことを考えていると麗が誰か呼んでいた
俺か？

冴子「見てやった方がいいぞ、女とは時にか弱く振舞いたいものだ」
「冴子さんもですか？」
冴子「さぁどうだろうね？それよりさん付けはなしでかまわんよ」
「わかったよ、冴子」

そういうと俺は麗の横に座ったが聞いていると永の話と孝の愚痴だった
なぜこんな愚痴を聞いているかというとなんとなく構ってやりたくなったのだ、だが
……

麗「だから、私はぁ永とぉ」
「うるさい！もう過去の人間をみるな！俺はお前の親友じゃない！今はどうかはわからないだが！昔いた友人も恋人も俺が殺した！永を友を恋人の目の前で殺した！いい加減現実を認めろ！俺らはまだ生きてる！そして生き残る！絶対にだ！だから永のやつ

の話をするのは……っ！」

俺は気が付いたら彼女に何てこと言っていたんだ

そう思い慌てて麗を見るが振り返ると目の前に彼女の顔があった

顔は上気しており体のあちこちで感じる彼女のぬくもりに息子を抑えつつ耐え続けることしばしば、ふと窓の方から犬の鳴き声が聞こえた

それも思ったより近く……

麗「わんこが吠えてる？」

「ああ、麗すまないちょっとどいてくれ」

麗「う、うん」

俺は麗をどけてから直ぐに2階に上がるとそこは地獄だった

俺達は本当の絶望は今から始める気がした

「孝、コータ、現状報告してくれ」

コータ「ヤバいよ」

「知っているよ、橋の方は？」
コータ「さっき警官が１人デモ隊のリーダーを射殺してからテレビは切れた、僕が双眼鏡で見たけどあれは地獄だね」
「そうか」

ベランダから周りを見るとショットガンを構えた男性が撃った後食われていた

孝「畜生ひどすぎる！」
コータ「小室っ」
孝「何だよ？」
コータ「撃ってどうするつもりなの？」
孝「決まってるだろ！〈奴ら〉を撃って……「忘れたか？〈奴ら〉は音に反応するんだぞ？」……！」
「生者は光と俺達を死者はさらなる贄を求めてここに来る」
冴子「むろん我々はすべての命ある者を救う力などない!!」
「自分の力で生き残らないとならない世界なんだ、今の世界はな」
冴子「宮本から聞いたよ、君は過去１日に対して厳しくあるものの男らしく立ち向

かってきた、だが……よく見ておけ、慣れておくのだ！もはやこの世界はただ男らしくあるだけでは生き残れない場所と化した」
孝「毒島先輩はもう少し違う考えだと思ってた」
冴子「間違えるな小室君、わたしは現実がそうだと言っているだけだ、それを好んでなどない」
「あれ？俺は？孝」
孝「いや、お前ならやりそうと思ったから」
「友人の扱いがひどい」

最後の俺のボケにみんなが笑いつつ孝はコータとベランダへ
冴子は階段を下りて行ったので俺もベランダから外を見ると2人の親子が1つ家に入っていくのが見えた

「あれは!?」

俺は慌てて衛星電話で通る人に電話をかけ、複数のコールの後男性の声が聞こえた

??『もしもし？誰だ？』
「俺です！神崎拓真です！希里（まれさと）さん！」
希里『拓真君か!?生きていたか！だが、こちらはあまり状況の良い物ではないんだ』
「知っています、こちらでも確認できています」
希里『それはどういうことだい？』
「近くにコテージが見えませんか？ライトで照らしている所です！」
希里『……ああ、見つけた、だがこちらには娘もいるしそちらに向かうのは厳しいぞ？』
「大丈夫です、今からそちらに向かいます」
希里『それは危険すぎる！そこまで危険を冒さなくてもいいんだ！』
「いえ、これは私なりの恩返しです、それにここで情報提供者であるあなたを死なせるのは勿体ない！」
希里『っ!?……わかった、ここで待って居よう』
「はい！直ぐに向かいます！」

俺は通信を切ると振り返りコータと孝を見た何故か部屋から冴子も来ていた

「どこまで聞いていた?」
コータ「僕はほぼ真横で最初から聞いてたよ」
孝「俺もコータと一緒だな」
冴子「私は途中からだが行くのか?」
「もちろん!あそこにはこの事件の情報提供者の恩人がいる、彼が居なければこの惨事から逃げきれていなかったかもしれないんだ」
冴子「そうか、それならこれを君に返そう」

そういうと冴子が紅桜を差し出してきた
俺はそれをつかむと意識に誰かが話しかけてきた

??『数時間ぶりね、拓真』
『ああ、久しぶりだな……紅桜』
紅桜『ええ、ところで昨日の昼過ぎにしたこと忘れてないんだからね』
『ああ、できれば許してほしいんだけど?』
紅桜『いや、と言いたいけれどあそこまで私(紅桜)だけで戦い抜いたら許してあげる』
『随分なオーダーだな』

紅桜『できないわけじゃないでしょ?』
『まぁね、じゃあ行こうか』
紅桜『ええ!』

俺は紅桜を腰のズボンに差すと俺の部屋から置いていたとある物を背負いながら階段を降りようとしたら横から明音とメアリーが出てきた

明音「拓真、行くんでしょ?人員配置は?」
「明音とコータはベランダから援護、冴子とメアリー、孝は門から見張ってくれ邪魔なモノが来たら殺せ」
全員『了解!!』

俺は階段を下りて玄関を開けると地獄の死者が嗚呼の叫びで待ち構えていた
俺は後ろを一瞬一瞥すると足に力を入れ跳躍し、着地地点にいる《奴ら》を縦に切り裂き目標の建物まで一直線に走った
邪魔なモノは切り殺す
縦に横に首や頭を上半身と下半身を一刀両断にしつつ俺は目標の建物前まで来て中

に入ると先ほど会話していた男性もとい希里さんとその娘のアリスちゃんがいた

「お久しぶりです、希里さん」
希里「ああ、相変わらず君はすごいな」
「まぁこっちも色々ありますから」
希里「そうかい、で？この状況どうするんだい？」
「ん？……うわぁ」

そこには鉄格子を破らんと暴れている化け物の群れだった
だがその対策のためにこれを持ってきたわけで……俺は背中から1丁のミニガンを出した

「これで掃討します」
希里「……もう何から突っ込めばいいかわからないな」
「いいじゃないですか、考えたら負けですよ？後これ耳当てです」
希里「ああ、ありがとう、ほらアリスこれを耳につけておくれ」
アリス「うん！拓真お兄ちゃん頑張って！」

「おお！任しとけ！」

そう言いながら俺はミニガンの回転を上げて引き金を……力いっぱい引いた

第7話　ミニガンは世界一最高の武器だ！

みなさんこんばんは！神崎拓真です
現在情報提供者である希里（まれさと）　弘毅（こうき）と娘の希里　アリスちゃんが逃げ込んだ家にいるわけだが……

「死にたい死体はどこだ！一列に並びな！」

死にたい死体とはこれいかに
ふと自分が言った言葉に突っ込みながら俺は固定脚に付けたミニガンを発射した
毎分４０００発の弾丸が鉄格子越しの《奴ら》を次々と肉片に変えていった
（アリスちゃんにはお見せできないので希里さんが目を塞いでます）
現在俺の携行弾数は４万発なので実質１０分しか持たないのだが俺が思ったよりかは《奴ら》の数が減り道路を埋め尽くさんばかりいたのが今はその辺に数体いるだけになっていた
ミニガンの残弾数を見る２万ちょっとだったのでこんなもんかなと思いながら後ろ

を振り返ると希里さんが苦笑いでこちらを見ていた

希里「相変わらず君はすごいと思っていたがここまで心強いとは思わなかったよ」

「そう言っていただけるなら幸いです」

希里「今のは本心から思ったことだよ、じゃあそろそろいけるかな？」

「ええ、希里さん達はあのコテージまで向かってください、正門で仲間が待っています」

希里「わかった、君はどうするんだね？」

「自分は殿についてあなた方を守ります」

そういいながら俺はミニガンを背負いなおしライトのモールスで明音とコータに援護を要請した

既に壊れた門からアリスちゃんを抱えた希里さんが慎重に出つつ俺もその後に続いた

前の《奴ら》を明音とコータが狙撃で援護し音にやってきたのをメアリー、冴子、孝が迎撃、今のところ順調だが正直どこまで持つのかわからないし今頃沙耶のことだから脱出の準備をしているころだろう

そんなことを考えながら《奴ら》を一体一体倒しながら進んでいると気が付いたらコ

テージに着いていた

「希里さん、先に入ってください」

希里「ああ、ほんとに助かったよ、ありがとう」

抱えられながらもアリスちゃんもお礼をいいつつコテージに入っていた

すると入れ違いで沙耶がこちらに来た

沙耶「拓真！あんたなんて無茶なことしてんのよ！」

「あの人達は俺の命の恩人だからだ、このウイルスの最初の情報提供者もあの人だ、もし知らなかったら俺は沙耶を救えなかったかもしれない」

沙耶「……はぁ、まぁいいわ拓真のおかげでこの辺りの《奴ら》は全滅したから明日の朝までなんとかなりそうよ、でも！もうこんな無茶しないで心配したんだから……」

「すまない沙耶、できるだけ気を付ける」

沙耶「絶対じゃないのね」

「ほんとは⊠絶対⊠しないって言いたいけどもうそんな状況じゃなくなったから」

沙耶「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

完全の沈黙にさすがの俺も気まずくなり始めたころ電話がなった
俺は沙耶に断りを入れ普通の携帯の画面に出ている文字に驚いた
（『南　リカ』ってまさか！）

「はい、神崎です」
リカ『拓真！よかった繋がったー！今どこにいるの？』
「今俺と一部の生き残りでリカの部屋で籠城してるけど……」
リカ『静香は一緒にいるの？』
「ああ、静香先生も俺たちと一緒だ」
リカ『よかった！ありがとう私の親友を助けてくれて』
「いや、医療の知識を持っている人が入ればこっちとしても心強いし、ところで今どこだ？ＳＡＴは確か数日前から洋上空港のテロ警備だったはずだけど？」
リカ『ええ、その通りよ今はわずかに残った人々と共に籠っているところよ』
「なるほど……リカ今から言うことは他言無用でいてくれるか？」

リカ『何かわからないけどあなたが言うなら黙っててあげる』
「よし、実はここ数日以内に洋上空港に国連所属の部隊が来る、そっちの状況も大方把握はできているはずだ」
リカ『それは本当？』
「ああ、だがいつ来るかわからないだから……」
リカ『それまで黙ってろってことね？』
「ああ」
リカ『わかったわ、それじゃあそろそろ切るわね』
「おう、リカ死ぬなよ？」
リカ『当り前じゃない、そっちもそっくり言葉を返すわ』

そうして電話を切るが静香先生に代わるの忘れていたこと気づいた
まぁまたかかってくるからいいか
そう思いながら本当の地獄が始まった初夜の月はいつにも増してきれいだった
……

・???上空・大統領専用機・極東方面軍司令ｓｉｄｅ

なぜこんな状況になっているのかまだ俺には理解が追い付いていなかった

ただわかるのは目の前の彼だったモノは俺を食い殺そうと口を開けながら迫っていた

彼は数十分前にファーストレディの看病をしていた者だ（第５話参照）

だが今は右腕が欠損しているのに平然と歩いていた

職員「閣下！逃げてください！」

後ろの方でＳＰの声に我に返り手に持っていた銃で彼だったモノや他の噛まれたモノを射殺した

この様子だと機体後部は駄目だろう

俺は後ろにいた応援に来たＳＰ達に現場の防衛を任せて大統領の元に向かった

部屋に入ると議長が右腕に包帯がされておりおそらく噛まれたのだろう

顔色は悪くかなり危険な状態だった

議長「大統領閣下！コードを入力してください！」

大統領「しかし・・・・」

議長「わたしは噛まれてしまいました！それにもうこの機体が着陸する場所は存在しません！だからこそ今のうちに合衆国にＩＣＢＭ（大陸間弾道ミサイル）を向けているすべての国を叩き潰さなければなりません！国家非常事態作戦規定６６６Ｄ（トリプルシックスデルタ）の発令以外憲法と人民への義務を果たす方法はないのです！……うぷっ……げぇっ」

部下「議長！」

議長「はぁはぁわ、私はもう駄目だ、だ、誰か私を……」

議長は最後まで祖国（合衆国）の事を考えていたんだな

俺は一歩前に出て拳銃の撃鉄を起こした

「私がやろう」

議長「すまない大将、後を頼む」

「了解しました」

そうして俺は議長の頭を吹き飛ばした
崩れ落ちた議長の死体に近づき近くにあったタオルを頭に被せようとしたら議長の胸ポケットから1枚の写真が落ちていた
そこには2人の男女と1人の女の子が写っていた
（本当は家族の事が心配だったんじゃないだろうか？だがそれでも彼は祖国に尽くしたのか……）
俺はふと今も日本で戦っているだろう戦友（拓真）の事が気になっていた
実は俺の友人の大統領の本名はギル・ドレイク、メアリー・ドレイクの父親だ
俺？俺の名前はリーアム・ハリスだ（え？あったの？）
とにかく今大統領である彼は祖国の長としてか1人の娘の父親としてか悩んでいるわけだが……
「大統領、国連は国連軍傘下の全部隊に全世界に非常事態宣言の発令が確認されました、そのためＩＣＢＭの対応も可能です」
大統領「君は私に核弾頭を撃てと言うのか？」

「はい、このままでは祖国に核の雨が降る可能性があります、それよりも早く敵勢のある各主要基地に核攻撃を!」
ギル「……友人として聞きたい、俺はどうすればいいリーアム」
「公私混同はあまりよくないぞギル」
ギル「わかっている、しかし!メアリーはまだ日本にいるのだろう?もし日本に核が落とされたら……」
「日本の海軍がどれだけの技量を持っているかあなたもご存じでしょう?それに彼女のそばには彼がいます」
ギル「神崎拓真か」
「はい、ギルは彼に何度か助けられただろう?今度はこちらが信じる番だ」
ギル「わかった、では私は最後の大統領として最後の仕事を果たす、私はここに６６６Ｄの発令を進言する!」

その発言はこの機体に生き残っている人そして後で知らされる司令官たちは祈るしかなかった
この世界にさらなる混沌を招く事をしらずに……

ｓｉｄｅｏｕｔ

・床主市御別川上流・主人公ｓｉｄｅ

またまた登場です！

現在朝を迎えて川底が浅い川の上流をハンヴィ２台で移動しているわけでしてちなみに車の人員分けは……

・１台目リカの所有車

運転手・静香先生

乗員・孝、コータ、希里さん、アリスちゃん

・２台目俺の所有車

運転手・メアリー

乗員・拓真、明音、沙耶、冴子、麗

である

なんか前の方からマザーグースが聞こえるが気のせいだろう
うん気のせいだ
左右で寝ている麗と冴子については沙耶と明音、メアリーからものすごい視線を感じる何故だ？
ふと冴子が寝ている方を見ると太陽に反射した透明な液体が……ま、まさか!?
これはよdピーーーーー……ゲフンゲフンま、まぁ落ち着いていこう
うんそうしよう

「もうすぐ対岸に着く岸に上がったら周辺警戒」
全員『了解』

軽い振動を感じつつ起きた2人（冴子は顔真っ赤にして）に外に出るように促すと俺達は全員降りた後女性陣は着替えていたのだが孝はコータから説明を俺は希里さんとジーク（希里さんと一緒に付いてきた）で戯れ女性陣の華々しい姿の思わず仕事モードになってしまった俺であった（その頃希里さんは念仏唱えてた）

とりあえず孝と俺、コータで堤防の上まで確認すると静香先生がものすごい勢いでハンヴィーを飛ばしてきていた（なんかコータがラットパトロールとか言ってなかったか？）

メアリーは安全運転だったが……

メアリー「何か文句あります？先輩」

「いえ別に」

コータ「チュニジアにいるのかな、俺……」

「コータ……そのネタどれくらいの人わかるかな」

冴子「これからどうするのだ？」

「とにかく、メアリーと明音は２台のハンヴィーにミニガンを設置して」

明音・メアリー「了解」

「俺はちょっと無線が使えるかやってみる」

それから俺は無線機の周波数を少しいじり声を出した

「こちら国連バイオテロ対策部隊長の神崎だ、誰か応答できる者はいるか？」

大隊長『こちら国連軍日本遠征第２大隊隊長です』
「大隊長、現在の状況を教えてくれ」（あれ大隊？中隊じゃなくて？）
大隊長『はい現在床主湾近海に国連所属空母より床主洋上空港に３個大隊が向かいました、我々第２大隊は総隊長殿を援護すべく待機中です』
「よし、こちらはこれより第１避難目標の高城邸に向かう、諸君らは出撃し本日中に俺達と合流してくれ」（やっぱり大隊じゃん！何で!?）
大隊長『了解しました！ただちに出撃いたします！到着までおそらく３０分ほどかかります』
「了解した」

通信を切りみんなのいる所に向かうと２台のハンヴィーには黒光りするミニガンが備えられていた
（ちなみにコータは終始興奮状態だった模様）
携行弾数は家にあるだけ持ってきたが各車に３万発しかない撃ち続ければすぐ無くなってしまう

「静香先生の方はコータがガンにつけこっちは俺がつく」

コータ「わかったよ、ところで拓真さっきの無線で何してたの？」
「ああ、援軍を呼んでた」
メアリー「どれくらいで着きそうですか？」
「３０分で着く、ただな……」
明音「ただ、どうしたの？」
「部隊数が１個中隊じゃなくて１個大隊になってるんだよ」
明音「え？そんなにくるの？」
「ああ、さっき大隊長が出てな空港制圧に３個大隊向かわせるそうだ」
国連の大隊は１個中隊２５０人が４個で１個小隊５０人が５個で編成されているつまりわざわざ俺達のために１０００人の軍人が来るわけで……
「なんでこうなった？」
明音・メアリー「「さぁ？」」
そんなのんびりな空気に着々と絶望が近づいてきていた

第８話　大隊合流！その頃太平洋で……

あっはいどうも神崎拓真です
今高城邸に向かっているわけだけど……

「誰もいないな、人も《奴ら》も」
麗「……ええ」

何もないのだ
燃える家、大破した車、地面に見える赤い血だまり、そこに似つかない複数の桜の木、
俺たちは桜の花びらが舞う中を普通に走り抜けていた
ちなみに車の割り当てだが……前回のままだ（第７話参照）
まぁとにかく平和と言えば平和ではある
コータの叫び声を聴かなければな

コータ「《奴ら》です！距離３００!!」

「全員戦闘準備！全員車内へ！コータはそのままガンにつけ！こっちは俺が持つ！ハンヴィはそのまま走り抜けろ！沙耶はナビ！」

沙耶「そこを右よ！」

静香「ここにもいる～」

沙耶「今度は左！左よ！」

コータ「どんどん《奴ら》増えてくる！」

沙耶「このまま押しのけてえぇぇぇ!!」

「メアリー！静香先生と並走して轢き殺せ！」

メアリー「はい！」

車道をハンヴィ２台で並走しながら《奴ら》を轢きまくる

弾け飛ぶ臓物を尻目にチラッと何か光った

それは複数の細いワイヤーだった

「ッ!?メアリーＳＴＯＰ！」

メアリー「ッ!?」

静香先生の方も少し遅いが気づいたらしくブレーキをかけていた
俺達の車両は間一髪止まり静香先生達の方を見ようとしたら高速で視界に写るハンヴィに強い衝撃と浮遊感からの背中を叩きつけられる痛み俺は受け身を多少取れたが頭を少し打ったらしく目の前に近づく口を開けた老婆に対応できていなかった

メアリー「先輩！」
明音「拓真！」
冴子「拓真君！」
沙耶「拓真！」
麗「拓真！」

目の前に迫る死と少女達が俺の名前を呼ぶ声に死を悟りかけた瞬間
微かに聞こえるエンジン音と無線機から漏れた男性の声

??「これより総隊長を救援致します！」

その瞬間目の前の老婆の頭が弾け飛び周りにいた《奴ら》が次々と爆発と銃弾の雨に

ただの肉片と化していく
上を見ると攻撃ヘリと輸送ヘリの編隊が空中でホバリングして攻撃を行っていた
ミサイルが飛び《奴ら》が空中へ弾け飛び
輸送ヘリからの機銃掃射で《奴ら》が人の形から肉片へと調理されていった
あらかた減ると輸送ヘリから次々と目出し帽を被った黒い軍服を着た集団が降りてきた

??『おけがはありませんか?』
『お陰様で助かったよ』
??『それはよかったです、自分は国連軍極東支部床主制圧大隊第２大隊長のジョナサン・ブレンバ中佐です』
『わざわざ私のためにすまない、できれば彼らにもわかりやすいよう日本語で話したいのだが構わないか?』
ジョナサン「了解しました、総隊長閣下」
「閣下はやめてくれ、それに総隊長にその肩書きはおかしい」
ジョナサン「わかりました、今この場にいるのは我々第１中隊のみです、残りは目標地点に我々が到着すれば来ます」

「わかった、上の支援ヘリはいったん母艦に戻るのか？」
ジョナサン「はい、輸送ヘリはもう帰還の途に就きました、攻撃ヘリの方も我々の安全が確保されるまで燃料が続くまで残ります」
??『ウルフ０１、こちらサクラ０１ワイヤー内より民間車両３台確認攻撃許可を』
『こちら総隊長、攻撃は許可できない彼らは味方だ』
サクラ『し、失礼しました！総隊長殿、安全地帯への避難は完了しそうでしょうか？我々の燃料が底をつきそうです』
『問題ない、後は我々で対処する』
サクラ『了解しました、ご武運を』

その通信を最後に支援に来た攻撃ヘリは帰路につき
彼らが言った通り一心会の車両がこちらに近づいてきた
孝達は安心していたが中隊の連中は警戒していた

「第１中隊後方警戒！民間人がワイヤー内に入り次第我々も入る！」
全員『はっ!!』
ジョナサン「総隊長だけでも中に入られては？」

「そうもいかない部下に残れと命じて俺だけノコノコと安全地帯に行くわけにはいかないさ」
　ジョナサン「了解しました」
「メアリー、明音!孝達をワイヤーの中へ!」
　明音・メアリー「了解!」

　時々出てくるターゲット(奴ら)を始末しながら孝達の避難が完了すると1個小隊ずつ中に入っていき最後に俺がワイヤーを潜ると沙耶が百合子さんに抱き着いていた
　俺は大隊長に残弾確認と隊員の簡易の身体チェックを済ませるように指示を出し沙耶さんと百合子さんに近づいた
「奥様、ご無事で何よりでございます」
　百合子「あなたもね拓真君、よく娘を守り切りましたね」
「総帥の命に従ったまでございます」
　百合子「本当にそれだけかしら?家臣だからだけではないはずだと思ったのだけれど」
「・・・・・・・」

百合子「まぁこの話はまた後で話しましょう、ついていらっしゃい」

そうして俺達は一先ず安全な楽園で一時の平和を得ることができたわけだ
まだ来ぬ地獄に、時は迫りつつあることには誰も気づく者はいなかった
……

主人公ｓｉｄｅｏｕｔ

太平洋洋上・米原潜艦内

私は何度も確認した、
だが事実だったコード６６６Ｄ
祖国(米本土)に対して脅威となりうる国家並びに主要基地に対する核弾頭攻撃である
私には妻と息子夫婦に可愛い孫がいる
今この海の上で世界中の人々が謎のウイルスで次々と化け物になっているらしい
妻たちははたして生きているだろうか？

もしかしたらもう化け物に……

水兵「艦長、副長より指揮所に来ていただきたいと」

「わかった」

何を考えている!

私は合衆国海軍軍人だ!

まずは祖国を守り部下をまとめ祖国に帰らなければ!

心でそう思い止め私は発射キーを持って指揮所に向かっていた

指揮所には既に発射キーを持った副長が重苦しい顔で待っていた

「命令指示書は確認したか?」

副長「はい、確認しました」

「そうか、君家族は?」

副長「自分には妻や子供はいません、しかし母や父がカリフォルニアで暮らしてます」

「……すまない、君達を祖国に帰せない私を許してくれ」

副長「いえ、これが我々の本来の使命です、たとえ祖国が家族がどうなっていても祖

国のために尽くすのが我々軍人の性ですから」
「そうだな」

彼の言っていることは正しい
だが心では本当は家族の安否を確認したいのだろう
私はその事を追求せず艦内無線のマイクに口を近づけた

『艦長より達する！大統領命令は最終的に確認された！これより本艦は北鮮並びに中共の主要都市、軍用施設に対する核攻撃を実施する！』

周りの乗組員達は騒然としていた
それはそうだろう私達はこれから禁忌に手を出そうとしているのだから
たとえそのための兵器だとしてもできれば使いたくないと願うのが人ではないだろうか？
副長は拳を震わしながら発射装置に近づいた

副長「まだ大統領はご無事なんですか？」

「ああ、今国連軍の基地に移動中の事だ、議長は死んだらしいがな」
副長「なれどその日
その時を知る者はなし
天国が天使たち
そして子・・・・」
「・・・天にまします我らが父もだ!」
私は感情を殺しながら命令を下しボタンを押した
「1番発射(ファイアワン)!!」

第9話　望まぬ形での再会と騒動

はい、こんにちは神崎拓真です
俺は今大隊長と打ち合わせをしている

「では、今空港制圧の部隊はもう向かっているのだな？」
ジョナサン「はい、現在は制圧中との事なのでもうすぐ完了するでしょう」
「そうか、次に我々の行動だがそちらは何か指示を受けているか？」
ジョナサン「いえ、総隊長をお守りせよとの指示以外は受けていませんね」
「では、輸送部隊が来たら民間人と一心会の人達を連れて脱出しろ」
ジョナサン「総隊長は？」
「俺は友人達と友人達の家族を連れてからこの地獄を脱出する」
ジョナサン「了解しました、その際はまた連絡をしてください」
「わかった、俺はこれから総帥に会ってくるから、部隊に伝達しておけ」
ジョナサン「イエス・サー！」

俺は明音とメアリーに総帥に会うことを伝えると百合子さんに案内されてとある部屋に入るとそこには一心会の主である高城　総一郎氏がいた

「お久しぶりです、総帥」
壮一郎「久しいな、元気にしてたか？」
「ご配慮感謝します、元気にしています」
壮一郎「なら良し、して今回の要件は久しぶりの会合ではあるまい」
「はい、前に奥様に話しましたが輸送部隊がこちらに向かってきています」
壮一郎「その事は聞いている、娘も助けてくれたことも感謝している」
「それが家臣の務めですから」
壮一郎「そうか、してそちらの要件は？」
「ヘリ発着用に敷地を開けて頂けませんか？」
壮一郎「そういうことなら構わないぞ」
「ありがとうございます」
壮一郎「拓真よ、１つよいか？」
「何ですか？」
壮一郎「お前はこれからの世界どう見る？」

「それは俺の口からは言えません、俺はあくまで部隊単位の指揮官です」
壮一郎「では家臣として問う！」
「……少なくとも当分は沖縄や硫黄島などの島か、北海道、四国、九州が日本政府が維持できる可能性があります」
壮一郎「政府は今機能しているのか？」
「……ここから先は第1級の情報統制下での話になります」
壮一郎「聞いた場合は？」
「我々が現在主要としている基地で拘束というなの保護を行います、一心会全員が」
壮一郎「その程度なら構わない、話せ」
「わかりました、現在日本政府は機能を停止しています、今自衛隊は北海道、四国、九州の各橋を米軍と共に封鎖中、警察や消防、救急は全て自衛隊指揮下に編入されています、海上自衛隊は日本海に展開している艦艇以外は今言った場所の港に移動を開始、米海軍第7艦隊は『シャイロー』、『カーティス・ウィルバー』以外は全艦横須賀を出航、現在は硫黄島に向け航行中です」
壮一郎「今後政府が復活はするのか？」
「今の所は不明です、しかし政府関係者が無事に脱出できたという報告は上がっていません、自衛隊無線を傍受して情報収集していますがほぼ全員死亡していますのでおそら

くは……」
壮一郎「そうか、わかった」
「こちらから個人で1ついいですか？」
壮一郎「なんだ？」
「土井さんに会わせてもらえませんか？」
壮一郎「……構わない、百合子案内を」
百合子「わかりました、こちらです」
「はい、では失礼します」

俺は襖を閉め百合子さんでついて行った
とある部屋の1つに入ると首と胴体が切断された男性がいた
彼は総帥の友人にして俺に優しくしてくれた数少ない人だった

「こんな形でお会いしたくありませんでした、できれば……できれば生きてお会いしたかった！」
百合子「・・・・・・」
「……もし次お会いできればあの世で会いましょう」

俺は彼を最後に一目見直した
彼の顔は総帥に踏まれたためか潰れて目玉が飛び出たままだった
部屋を後にした後百合子さんとは別れ俺は無線機に口を近づけた

「総帥にヘリポートの許可を取り付けた、第3，４中隊で作業を開始せよ」
ジョナサン『イエス・サー！』
「私は少し席を外す」

俺は屋敷を出て池まで来るとそこには冴子がいた
綺麗な着物姿で
俺は一瞬呆然としたがすぐに立て直し近づく

「冴子」
冴子「拓真君か」
「ここで何をしているのかと思えば、錦鯉ですか」
冴子「ああ、見事なものだ」

「ええ……冴子」
冴子「どうしたんだい？」
「その着物姿似合ってますよ」
冴子「ッ!?……あ、ありがとう／／／」
沙耶「何勝手に人の家でイチャついてるわけ？」
「沙耶」
冴子「……私は、いやわたしも機嫌がいいわけではないよ」
沙耶「理由をわかっているわけね、あなたも」
「何の話をしているんだ？」
沙耶「拓真はあの場にいなかったわね」
「ああ」
沙耶「私達だけで話し合ったの」
「話し合い？」
沙耶「そう、昨日と変わらない今日、今日と変わらない明日を当然のものとして受け入れる幸せは失われたわ!!……たぶん、永遠に」
冴子「そうだ、あの懐かしい世界はすでに滅びた、よって君が口にした設問に戻るわけだ」

「設問？」

沙耶「ええ、飲み込まれるか、別れるか！どちらかを選ぶかでこれからの全てが変わる」

「……俺はどちらにせよ、みんなについていくぜ」

沙耶「あの兵隊はどうするのよ？」

「床主空港で基地化が時期に始まる、彼らはそこで合流する」

冴子「私は＜奴ら＞以外の命も奪っている、介錯だったつもりだが……いや、介錯とは子供のなすべきものではなかろう」

沙耶「アタシだって自分が生き残るためにクラスメイト達を気にせず動いた、間違っているとは思わないけど、子供が教わる正義とは全然違……どうしたの？」

冴子「今見知った顔が……」

「あれは！」

今のはバス残留組の生徒で確か紫藤のシンパだてことは紫藤がこの場所を狙ってる!?

時々聞いていたが途中からあまりよろしくない声が聞こえていたから録音機に繋げて放置していたがしくったか？

俺は無線機に手を当てようとしたら総帥の声が聞こえた

壮一郎「なにを騒いでいる!!」

冴子・沙耶・拓真『!!』

俺達は急いで声のした方へ向かうとそこには一心会のメンバーに囲まれたコータがいた

周りをよく見ると部下達も気づいたのか武器を構えながら近づいてきていた

俺は手で警戒を解かせる

とりあえず様子見だ

おそらくコータのやつ武器を外に持ち出して一心会の人達にバレた感じかな?

男性Ａ「か、会長!」

男性Ｂ「こ、このガキが銃をオモチャと間違えてやがるんで」

壮一郎「少年、名を聞こう! 私は高城壮一郎、憂国一心会会長だ!」

コータ「ひっひっひ、平野コータ藤見学園２年Ｂ組出席番号３２番です!!」

壮一郎「声に覇気があるな、平野君!ここにたどりつくまでにさぞ苦労したことだろ

う」
百合子「あなた、この子は……」
壮一郎「所属するクラスと拓真から知れた」
百合子「まぁ」
壮一郎「どうあっても銃は渡さぬつもりか」
コータ「駄目です！嫌です！銃が無くなったら俺は……俺はまた元通りになる！元通りにされてしまう！自分にできることがようやく見つかったと思ったのに!!」
壮一郎「できることとはなんだ？」
コータ「そ、それは……」

もうそろそろいいかな
これ以上の会話はコータにはキツイし無駄だ
俺はコータの後ろから前に立ち塞がる

「沙耶の護衛ですよ」
コータ「た、拓真！」
壮一郎「沙耶の護衛だと？」

「はい、彼の射撃技術には感服を覚える所があります」
壮一郎「だが本来の護衛は貴様であろう？」
「左様でございます、しかしいくら自分が戦闘に特化していたとしても沙耶を護衛し続けるのは困難です」
壮一郎「だから彼を？」
「はい、彼なら沙耶を守れると信頼したからです、不満がございますなら私の首を刎(は)ねてください」
冴子「拓真君!?」
沙耶「拓真!?」
コータ「そ、そんな!?」

他の皆も言葉には出さないが呆然としている
メアリーと明音は後ろで武器を構えながら見守っている
ジョナサンも騒ぎに気付きこっちに来て部下を抑え込んでいた
しばらく沈黙が続く

壮一郎「……まぁいい、今回の件は不問とする、それに今お前に消えてもら

うのは困る、特に優秀な家臣であるお前がつくったチャンスを不意にしたくはあるまい」
「ありがとうございます」
壮一郎「よい、借りた恩を返したまでだ」
「そうですか、中佐！」
ジョナサン「はっ！」
「あそこの壁の裏にいる学生を捕まえろ！スパイだ！」
ジョナサン「はっ！おい奴を捕らえろ！」
兵士「「はっ！」」

去って行く兵士達を見送りながら
俺は安堵してしまった
今になって思う
やはり死ぬのは怖い
いや死ぬのが怖いんじゃない
みんなを残して死ぬのが嫌なんだ
みんなをこの地獄に残して先に死ぬのが心残りだったんだ

俺はその事を顔に出さず
中佐達の所に向かう
まだまだ苦労は続きそうだ
騒動もまた、な

第１０話　作戦変更とゴミ処理

どうも拓真です
先ほどでの騒動も終え
中佐に工事の具合を聞くと一心会の一部の人の手伝いによりヘリポートは完成していた
輸送部隊もそろそろこちらに来るとの事
俺は一度みんなと別れ
総帥達と行動を共にする
何かあるようだし

壮一郎「拓真、１つ頼みがある」
「何でしょう？」
壮一郎「いくつかの分家の者が集まりまだ生き残って籠城しているのだ」
「場所は？」
壮一郎「そこまで遠くないはずだ、それぞれ有力の分家の人間と護衛の者達とその家

族だ」

俺は総帥の部下からもらった地図を見る

場所は三か所

どれもヘリならここから帰還途中に寄れるコースだが

輸送ヘリの数からして総帥達まで運べない

「距離は問題ありません、想定されている人数、物資もこれより来る輸送隊でも対応できますが……」

壮一郎「が？何か問題があるか？」

「はい、輸送隊の数は確かに足ります、三か所分までなら」

壮一郎「つまり我々の輸送まで無理か？」

「ええ、追加の輸送隊は頼めますが時間を要します」

壮一郎「構わん、彼らは長く私に仕えてくれた家臣たちなのだ」

「あなたの大事な家臣なら私にとっても大事な同胞です、わかりました手を尽くしましょう」

壮一郎「感謝する」

「いえ、総帥の頼みなら当然です」

俺は総帥に頭を下げ部屋を後にする
廊下に出るとそこには明音、メアリー、ジョナサンが待っていた
明音とメアリーは先ほどの出来事を心配していたのだろう
ジョナサンは先ほどの後の学生の事だろう
俺は総帥との会話内容を伝える

「俺からは以上だ、そっちはどうだ?」
ジョナサン「はっ!、例のスパイは捕らえました、藤見学園の学生と言っています」
「だろうな、今はどうしている?」
ジョナサン「部下達に見張らせています」
「そうか、俺が行くまでそのままだ」
ジョナサン「はっ!」
「それと中佐、これより15分後に正面玄関に各中隊長と無選手を集めろ、後先ほど伝えた事を輸送隊と基地に伝えろ」
ジョナサン「はっ!直ちに!」

彼が去るのを見送り俺は明音とメアリーの方に向く
彼女達はコータ達の対応にあたらせていた

「コータ達は大丈夫だったか？」
明音「ええ、今はみんなは部屋にいるわ」
「そうか」
メアリー「先輩、何故あのような事を？」
「それが家臣としての義務だからだよ」
明音「私達の事より家臣の義務の方が大事だったわけ？」
メアリー「明音さん!?」
明音「メアリーは黙ってて！で？どうなの？」
「確かに家臣の義務を優先した、それがあの場での収める方法だと思ったからだ」
明音「もしそれで切られてたらどうするつもりだったのよ！」
「それも考えたが……」
明音「もう二度とそんなこと言わないで！」
「……明音」

明音「私達がどんな気持ちで見てたと思う?想い人が死ぬかもしれないのに黙って見るしかできない気持ち、あなたにわかる!?」
「そ、それは……」
メアリー（明音さん、サラッと告白してるわかってます?）
明音「私だけじゃなくてメアリーや高城さんに宮本さん、毒島先輩も同じ気持ちだったのよ!?」
メアリー「明音さん!?」
明音「少しはその頭で考えてよ!」

最後にそう言って明音は走り去っていた
俺はそれをただ見るしかなかった
メアリーも一瞬呆然としながら
「私も明音さんと同じ気持ちです」
っと言い残して明音を追いかけていった
俺は何も言えなかった
それどころか俺はあの子達の気持ちにも気づけていなかった
いや気づきたくなかっただけかもしれない

俺は呆然と廊下で立っていると後ろから誰かが声をかけてきた

百合子「いくら戦術の知識はあっても人の恋心まではまだわからないわね」

「……奥様」

百合子「こんな世界になったんです、悔いのないようにしなさい」

「わかりました」

百合子「法もないのだから1人じゃなくてもいいと思いますよ？」

「奥様!?」

百合子「フフッそれでは、またね」

子供の成長を喜ぶ母親のような笑みを浮かべ去って行った

俺は一瞬考えその場を離れる

今は現状を打開しないと

後回しはよくないが先に出来ることからしよう

すぐに部屋で軍服に着替え

各士官が待つ正面玄関に向かう

既にそこには各中隊長と副隊長、無線士官がいた

ジョナサン「各員揃いました」
「うむ、これよりこれからの行動について話をする、まず再確認だ、貴官らの命令権は誰がある？」
ジョナサン「総隊長であります」
「わかった、第１中隊はこのままここで防衛待機だ、第２，第３，第４中隊はこれより合流する輸送隊と共に三か所の目標に向かえ、輸送隊には先ほど大隊長に伝えているので問題ない」
第３中隊長「目標の内容は？」
「民間人の救助だ、今は一部の武装で防衛している、第２中隊がＡ、第３中隊がＢ、第４中隊がＣポイントに迎え」
第２，第３，第４中隊長『了解!!』
「補足だが民間人は一心会の関係者が仕切っているためこちらからそれぞれ代表者が同乗する、失礼がないようにな」
第２，第３，第４中隊長『はっ！』
「第１中隊はこれより屋敷の防衛体制の見直しだ、何せ３個中隊も抜けるからな」
第１中隊長「了解しました」

「この後第２，第３，第４各中隊長は代表の者と合流、状況把握と作戦を合わせろ、第１中隊長及び各所属小隊長、大隊長は防衛計画の見直しだ、質問はあるか？」
　ジョナサン「部下達にそれまで何か仕事をください、待ってる間暇なので」
「わかった、第３，第４中隊は俺の家の地下室の兵器及び機器の対ＥＭＰ処置を頼む」
　ジョナサン「総隊長！それは……」
「アメリカはさっき核攻撃命令を出した、おそらく目標は朝鮮半島および中国や中東の国々だろう、もしかしたらロシアも含まれているかも」
　ジョナサン「それでは各支部が危険では？」
「一応、米国は支部の近くに落ちるコースの物はない、けど他の国はそうとは限らない」
　ジョナサン「そのための対策を？」
「ああ、できるだけ生き残るためにな」
　ジョナサン「了解しました」
「よし、第２中隊は屋敷の各門に対ＥＭＰ仕様になったセントリーガンと機銃付きジープを置いていてくれ、それと地下にある全ての弾薬及び補給物資もだ、それではかかってくれ」
　全員『はっ！』

離れていくのを見届けると
今度は第1中隊所属の各小隊長との作戦会議だが
その前にやることを済ます
俺はジョナサンと少数の部下を連れて
俺達が使っているテントに向かう
その中には先ほど捕まえた学生がいた
彼は確か紫藤と一緒にいたやつだったはず
それにさっき盗聴器のスイッチをつけたが
誰か外に強制的に出されたようだ
つまりは、そういう事なのだろう

「おい」
学生「な、なんだよ？こんな事して紫藤先生が許さないぞ！」
「たかが教師風情が軍人に勝てるかは知らんがな」
ジョナサン「勝てないでしょうな」
「特に紫藤なら罪悪感すら湧かず消せるだろうな」
学生「ぼ、僕に何の用だ？」

「何、１つ聞きたいのだよ？紫藤はどこだ？」
学生「そんなの教える気はない！特に人殺しを当たり前にする化け物になんか！」
「ではやり方を変えよう、死にたくなかったらさっさと話せ？」
学生「ヒッ!?」
「吐け、紫藤は今はどこだ？何を企んでいる？」
学生「い、移動中だからどこかはわからない、せ、先生はここに助けを求めるつもりだと思う」
「そうか、ありがとう、おかげで助かったよ」
学生「そ、そう？」
「ああ、だから死ね」
学生「……え？」

俺はサイレンサーを付けた拳銃でこいつの頭を撃ち抜く
正直今の世界においてこいつや紫藤達は害悪でしかない
だから消す
この後面倒事を起こさないためにも
彼は何が起こったかわからない顔で死んでいた

頭を吹き飛ばしたからゾンビになる事もないはずだ
俺は部下に彼を死体袋に入れるよう指示を出す

ジョナサン「よろしかったので?」
「彼はどっちにしろ死んでいたさ、中佐これを聞いてみろ」

俺は紫藤達と別れてから今までの音声記録の一部
特に酷い部分を聞かす
それは紫藤の狂った洗脳による痴態行為の音声だった
紫藤の性格を知ってる俺は顔を顰めるだけですんだが
ジョナサンは怒り心頭だった
まぁ普通はこうなるはずだ
俺だってあのままいたら沙耶や明音達がコレらに混ざると思うと虫唾が走る

ジョナサン「こ、こんな事が!?こんな事が人がすることですか!しかも教師が!」
「コレ(紫藤)はそういうやつだ」
ジョナサン「総隊長はよく耐えられましたね」

「まぁ紫藤とはそれなりの付き合いさ、裏でな」
ジョナサン「……失礼しました、つい我を忘れてしまいました」
「気にするな、それが常識ある者の反応だ」
ジョナサン「先ほどこいつらはここに来ると言っていましたが？」
「受け入れは一心会がするだろう、だがその後は我々の管理下だ」
ジョナサン「よろしいので？」
「【国連非常事態時対策法第１条、要救助者及び集団がいた場合保護を行う】これは守らなければならない」
ジョナサン「そうですが……突然何を？」
「まぁ聞け、問題は続きだ」
ジョナサン「続き？」
「そう【第２条、任務活動及び救出活動において妨害並びに悪意ある者又は組織は排除せよ】」
ジョナサン「しかし彼らはその対象かどうかはわからないのでは？」
「確かにそうだ、だがそれを判断するのは誰だ？」
ジョナサン「現地指揮官かその場で階級が上の者ですが……あっ！」
「そう、この場でここにいる人達の生死は俺が握っている、そこに彼らは来れば

……」

ジョナサン「排除対象になりうると?」

「それを決めるは俺だ、やろうと思えば一心会の人達のみ助けるという選択肢もある」

ジョナサン「しかしそれは!」

「わかっている、だから中佐は俺が指示を出したら……処理を頼む」

ジョナサン「了解しました、お任せください」

「じゃあ、第1中隊の作戦会議をしに行くか」

ジョナサン「はっ!」

俺は中佐を引き連れその場を離れる

今でも思う

これが正しいのか?

確かに法的には問題ないが

相手は元一般市民

いくら現敵対集団としても

相手の生命に終止符を絶つ命令をするのは気が重い

多分俺はこれからもこの事で一生考えるし

背負っていくだろう
ふと空を見る
こんな地獄じゃなければいい空だな
そう思えた

第１１話　散る命と選択肢

こんにちは？
こんばんは？
拓真です
あれから色々あり
まず救出に来る予定だった
輸送部隊と護衛部隊を
それぞれ三ヶ所に移動するように指示
その際に各中隊と代表者を乗せる
俺はそれを見送ると次は第１中隊の各小隊の警備確認だ
それぞれ主要の門を３か所に限定
他の門はバリケードと補強で完全に封鎖
俺の家の門も完全に封鎖し
使えるのは屋敷と家を結ぶ通路のみ
そこにも一応防衛用のセントリーガンがある

左右の門には第２，３小隊をそれぞれ配置
正面の正門は第１小隊と一心会の人達が
第４，５小隊は応援要員兼補給要員だ
俺はそれぞれの小隊長に状況確認を終え
最後に第１小隊の方に来たのだが……
・・・・・・・
まぁ軍人である俺達を基準にするのは間違いだがアレはないだろう
アレとは今この屋敷にいる避難民達だ
といっても一部の頭が飛んだ連中だけど
俺は中佐に近づく

ジョナサン「総隊長」
「何事だ？」
ジョナサン「デモみたいなものですかね、感染者に人権を訴えてる連中です」
「死人に人権を求めるのが間違いだ」
ジョナサン「意識がないだけかもしれません」
「君はあいつらと同類か？」

ジョナサン「いえ、違います」
「……もしかして家族がいるのか？」
ジョナサン「妻は硫黄島勤務です、しかし私の父と母はまだアメリカで生きていました」
「連絡は？」
ジョナサン「我々は戦死者です、幽霊は何も語りません、しかし昔実家の近くまで来たので覗きました」
「で？どうだった？」
ジョナサン「２人共笑顔でした、こっそり部下に頼んで周りに聞き込むと笑顔の理由がわかりました」
「聞いても？」
ジョナサン「『息子が安心して逝けるように毎日楽しく過ごしている』だそうです」
「……そうか」
ジョナサン「そう悲しそうな顔しないでください、それよりも彼らです」
「一応聞くが感染者が人間に戻る可能性は？」
ジョナサン「ありえません、感染すれば必ず死にます、その後脳による何らかの異変が起きて人を襲います」

「その結果があの異常な腕力と顎の力か」
ジョナサン「はい、本来の人間のリミッターが外れている模様です」
「なるほどな、結論彼らは死者か」
ジョナサン「はい」
「まぁ彼らはそんなこと言っても聞かないか」
ジョナサン「でしょうな」
「第１小隊から１０人ほど人を回してくれ」
ジョナサン「私と第１分隊がお供します」
「それだと俺いれて１２人だけど？」
ジョナサン「不満ですか？」
「いや、過剰戦力だな」
ジョナサン「今更です」
「だな、全員完全武装で向かうぞ」
ジョナサン「全員既に出来ております」
「……後は俺だけか、少し待て」
ジョナサン「その必要はないかと」
「え？」

中佐が目線を向けた方には明音とメアリーがいた
それぞれに持ってるのは俺が使う妖刀『紅桜』と拳銃が1丁
予備の弾薬はなさそうだ
多分彼女達はこの後何が起きるかわかってるんだ
俺が何をしようとしているのかも

「明音、メアリー」
明音「どうせ行くんでしょ？部下に頼まずあなた自らが」
「せめての慈悲だ」
明音「殺すのに慈悲もいるかしら？」
「この地獄を早く退場する事と命の重みを背負う事、これで慈悲になるだろう」
メアリー「……先輩」
「メアリー、もしかして予備の弾薬がないのは……」
メアリー「できるだけ殺してほしくないからです」
「メアリー……」
メアリー「それになくても先輩なら何とかなるでしょ？」

「それは言わなくていい」

最後の言葉で笑う３人
俺は２人から武器を受け取る
俺はふと彼女から声をかけられる

紅桜『今度はおいしいモノが飲みたいわ』
『おいしいかはわからないけど生き血は吸えるよ？多分ね』
紅桜『そう、楽しみにしているわ』
『ああ』

俺は紅桜を左腰に
拳銃を右腋のホルスターにしまう
軍服の上着を着て拳銃を隠す
俺は彼女達の方を見る
２人共笑顔だった
だけど多分だけど内心では行ってほしくないんだろうなぁ

俺は笑顔で返す

「行ってきます」

明音・メアリー「「いってらっしゃい」」

今度は中佐と部下達の方を向く

けど何故か緊張した空気より

なんか和んでるような空気だった

ジョナサン「閣下でもあんな顔されるんですね」

「あんな顔ってどんな顔だよ、後閣下はやめろ」

ジョナサン「失礼、では行きましょうか総隊長」

「ああ、総員対暴徒戦用意、着剣」

全員『はっ！』

この事は総帥には既に話は通してある

一心会の人達も俺なら信頼できるそうだ

これで彼ら避難民の生死の権利は我々が掌握した
徐々に近づくテント
他の分隊があのテントの隔離を行っている
もちろん気づかれないように
俺と中佐のみ入る
他は周りを囲ませる
声も聞こえる距離まで近づいてきた

女性「――――――――――――！――――――――――――――――――――！」
孝「あの――――体――――――話―――――るんです？」
女性「子供が口を挟む事じゃない！」
「なら我々が相手をする！」
沙耶「た、拓真？」
コータ「拓真！」
孝「………………拓真」
「そう３人で俺の名前を呼ぶなよ」
女性「何よあなた達！」

「我々は国連の者です」
女性「はぁ？子供が何を言ってるかしら？」
「冗談に聞こえますか？この間のヘリを見なかったですか？」
女性「だから何？子供が割り込む事じゃないわよ！」
「1つ言っておきます、あなた方の命は今我々は握っている」
女性「はっ！結局それが言いたいだけじゃない！」
「……は？」
女性「そうやって脅して私達に殺人を見過ごせと言うのね!?」
「既に死んだ人間に殺すも何もないですが？」
女性「詭弁だわ！彼らは生きているわ！」
「あなたも見て来たでしょう？あの惨状を」
女性「だから何？私達はあなた達のみたいな野蛮な事をしない！」
「もう茶番をいいか、これは警告です速やかに解散しなさい」
女性「これが茶番ですって!?」
「もう1度言います、解散しろ」
女性「断るわ！むしろあなた達がここから立ち去りなさい！あのヤクザの所にね！」
「……これが最終忠告です、解散しなさい」

女性「我々はあなた達野蛮人に屈しないわ！私達平和を愛する日本人が殺人病患者の人達を救うのよ！」

……もう無理だな
さっきから聞こえる声も支離滅裂
これ以上の交渉を不可能
抵抗しない避難民は救おう
それぐらいの慈悲で満足してもらう
俺は紅桜を一瞬だけ振る
右手に持つ紅桜には血はなく
その代わり刀身は赤くなっていた

女性「とうとう武器を出したわね！」
「いえ、もう斬りました」
女性「なに……を？」
男性「ヒィ!?」
孝「拓真！お前……」

そこには首と胴体が離れた女性がいた
そう、先ほど喚いていた人だ
するとテントの周りから銃器を構える音が聞こえる

「逃げても無駄です、周りは俺の部下達がいますから」
男性「こ、こんな事が許されるはずがない！」
「ええ、本来なら許されるはずがないでしょう、しかし彼女は我々の法に触れた」
男性「ほ、法だと？」
「国連非常時対策法です、彼女はそれに触れ処断されました」
男性「そ、そんな……」
「……あなたのご家族は今どちらに？」
男性「つ、妻が近くのテントで休んでいる」
「そうですか、ではあなたに選択権を与えましょう」
男性「な、なんだ？」
「1つ、まだこのくだらない茶番を続ける、その場合あなたを含むここにいる全員処分します、もちろん奥さんもです」

男性「なっ!?そんなふざけた真似を!」
「最後まで話を聞きなさい、２つ、あなただけ命乞いをする、この場合あなたと奥さん以外を処分します」
男性「そ、そんな……」
「３つ、あなたここの避難民を纏め我々に従う、この場合は全員仲良く生き残ります」
男性「な、なら３つ目を……「ただし!」……え?」
「あなたが纏めきれずまた暴動が起きれば全員処分します」
男性「そ、それは……」
「今決めてください」

男性は難しい顔をしだした
周りの避難民は彼の判断で生死を握られてると知ると顔を青白くしながら見守る
一方孝やコータは何か言いたげだったが中佐が抑えられていた
沙耶は黙ったままだ

男性「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

男性「……1つ聞きたい」
「何でしょう?」
男性「俺の職業を知っているのか?」
「ええ、知っています」
男性「ッ!?そ、そうか」

実の所知らない
ただ昔市役所で職員を纏めてる所を見た事があった
だから選択肢を与えた
もしかしたらの可能性に賭けた

男性「き、決めた」
「そうですが、答えをどうぞ」
男性「……3つ目だ」
「あなたに纏めれますか?」
男性「やってみよう」
「そうですか、では信じます、中佐武装解除」

ジョナサン「はっ！」
男性「あ、ありがとう！」
「礼は不要です、行きますよ」
ジョナサン「了解しました！」
孝「お、おい！拓真！」

俺は外に出る
既に第1分隊は武装解除し俺の前にいた
沙耶とコータは納得していたが
孝は何故かやるせない気持ちのようだ
まぁ仕方ないが

「中佐、彼女を死体袋しまっておいてくれ」
ジョナサン「わかりました」
「ではここは任せる」
ジョナサン「はっ！」

俺はここを彼らに任せ
屋敷の方に戻る
もちろん孝達も一緒だ
屋敷の玄関まで来ると俺は振り返る

「言いたいことがあるなら今だけ聞くぞ、孝」
孝「何で？」
「今は軍属としてではないからな」
孝「そうじゃない！何故殺した！」
「邪魔だからだ」
孝「なに!?」
「正確にはさっき言った法に照らして彼女は我々の妨害する危険因子なった、だから処分した」
孝「もっと他の方法もあっただろ！」
「無理だ、彼らは俺と君らを子供とみて聞く耳を持たないだろう」
孝「でも！」
「現実を見ろ！彼らのように現実を受け入れきれないお前ではないだろう？」

孝「クッ！……すまない拓真」
「いいんだ、理解してくれたなら」
孝「この後どうするんだ？」
「少し部屋で寝る、疲れた」
孝「そ、そうか、じゃあまたな」
「ああ」

俺は孝達と別れ上に上がり俺の部屋に入る
拳銃を置き
上着もハンガーにかける
紅桜を机に立てかける
彼女はさっきから何も言ってこないが
どうなんだろうか？
まぁそんな事は本人（？）が返答しなければ意味がない
俺はベットに寝そべる
・・・・・・・
本当は他にも方法があったのかもしれない

でも今はこれが精一杯だ

俺は気分が重くなると共に目を閉じた

第１２話　空港制圧

・床主国際空港内・南リカｓｉｄｅ

あれからどれぐらい経っただろうか？
見渡す限り
死体ゾンビ死体ゾンビ
そればっかりだ
彼からの連絡が本当なら
救援は来る
自衛隊より早くだ
だが現実は非情である
最後の飛行機を上げてから今まで
上から覗いているが
これは狙撃より爆撃した方が早い気がしてきた

サクラ『ダリア、ダリア、こちらサクラ、現状知らせ、送レ！』
田島「サクラ、サクラ、こちらダリア……」
「今必要なのは狙撃じゃなくて爆撃よ」
田島「……現状は最低で最悪なり送レ!!」
サクラ『……了解、ダリアは現配置を破棄、サクラに合流せよ』

まぁ予想通りね
私達は空港の屋根を走る
ちらりと眼下を見るが
何度見ても地獄である
ここよりもっと酷いのが町の方なのだ
ここは洋上空港
交通手段は定期船のみ
なのにこの惨事だ
今でも放送で呼びかけをしているが
はたして効果があるのか
私達はロビーに入り周りを見る

そこには何とかここに逃げて来た避難民達がいた

田島「もしかして全然なのか？」

警備員「ああ、何度も放送しているがチラホラと逃げて来ただけだ、ビル全体で１００人もいない、連絡もほとんどない、信じられないよ！この空港には職員だけで２万人はいたのに」

「民間人1万人を加えて全部3万人……酷い有様ね」

警備員「おいキューバ物かよいいの吸ってんな、てかここは禁煙だぜ!?」

田島「そんなこと言ってる場合かよｗｗ」

「吸うなら今の内よ？世界中がこの騒ぎだもの国内の在庫が切れたら二度と手に入らないわ」

まぁ彼の所ならまだありそうだけど……

その後私は田島を連れてプレミアムラウンジに入った

ここには狙撃支援班班長（＝エス班長）に他の隊員に

大量の銃器がそろっている

もちろん弾薬も

田島「以外に数がありますね、エス班長」
エス班長「空港には非常時に備えて食料や飲料水含む武器弾薬が貯蓄されているからな、問題はむしろ……」
「……銃を扱える人数は？」
エス班長「南の言う通りだ、ターミナルビルには俺達ＳＡＴや空港職員、機動隊の特殊銃機隊、海上保安署のＳＡＴ、税関には麻薬Ｇメンもいる、緊急処置として避難民から射撃経験者も募った」
「そのうち生き残っているのは何人です？」
エス班長「５０人もいない、そこで南達にやってもらいたいことがある」
「その前に１ついいですか？」
エス班長「なんだ？」
「その無線機は生きてます？」
エス班長「ああ、だがどうした？急に」
「本当なら言わなかったんですが私もここにいる人達を助けたいし、希望があってもいいと思いまして」
エス班長「何が言いたい？」

「国連の部隊が動いています」
　エス班長「それは本当か？」
「はい、私の友人が国連の関係者なので」
　エス班長「だがこの地獄をどうにかできるのか？民間人を救えるか？」
「大丈夫だと思われます」
　エス班長「その根拠は？」
「彼の名前は神崎拓真です、聞き覚えはありませんか？」
　エス班長「神崎拓真？……ッ!?確か署長が南に調べるなと言われた少年だったか？」
「はい、そこまで情報統制する重要人物からの情報です」
　エス班長「なるほど、それなら信用できるか」
「はい」

　本当ならこんな情報は教えるべきではない
　だっていつ来るかわからないから
　でも何故か今行ったら相棒を失う気がしたから
　するとどこからかヘリの音が聞こえた

エス班長「なんだ？」
田島「ヘリのローター音か、これ？」
「ッ!?まさか！」
??『……ち……連……応……し』
エス班長「こちら床主警察狙撃支援班班長だ、貴官の所属を述べよ！送レ！」
??『こちら国連軍極東支部所属ネイサン中佐だ、現在の床主空港の状況を報告せよ』
エス班長「国連軍だと？じゃあ南の言っていた、救援部隊か？」
ネイサン『救援部隊かと言われれば何とも言えないが我々は床主空港を制圧しに来た部隊としか言えない』
エス班長「それでもだ、現在一部のターミナルに民間人と立てこもっている、他にも様々な場所で籠城している人達もいる」
ネイサン『滑走路及びその他空港設備は？』
エス班長「ほとんどが無事だが化け物どもが徘徊している」
ネイサン『数は？』
エス班長「不明だ、だが少なく見積もって2万だと思われる」
田島「……班長」

「・・・・・・・・」

当然だろう
非情かもしれない
だがさっきまでの放送から連絡を受けた者
ここに避難して来た者
道中で死んでしまった者
死んでも歩き続けるモノ
それが周りに現実を突きつけるように歩き回っている
班長がそう判断するのも当然だろう

ネイサン『了解した、これより掃討作戦を開始する、その前に放送もしくはあらゆる通信手段で屋内から出ないように伝えてくれ、部下達も当然下げてくれ、終わったらまたこの無線で連絡を』
エス班長「了解した」
「田島、行くよ」
田島「行くってどこにだよ?」

「民間人を抑えによ、それとこの事を他の連中にも伝えるのよ」
田島「わかったよ」
エス班長「南、頼むぞ」
「はっ！」

これでこっちは少しは安心できるわね
拓真、あんたは今どうしてるのよ？
死ぬんじゃないわよ
静香、無事でいて！

ｓｉｄｅｏｕｔ

床主空港上空・ネイサン・グレイ中佐ｓｉｄｅ

やっと着いた日本の床主市
総隊長の生まれ故郷

だけど目の前に見えるのは地獄だった
国際空港なだけあってターミナルも多い
それに旅客機もだ
ここにはそれなりに残っている所を見るとパイロットの人も食われたのだろう
もしくはナッタか
眼下にはヘリのローター音に引き寄せられ集まってくる化け物ども
空港職員や整備要員
キャビンアテンダント
乗客だったであろう人
誰もがこうなるなんて思ってなかっただろう
私だって思わなかった
最初の報告は中東方面での感染症だった
感染経路は不明
感染力は高く致死率は１００％
しかも死んでからは起き上がり
生きている者を襲う
ケガが浅い者なら生き返ったと思う

だがそこは紛争地域だ
しかもゲリラの拠点の1つを殲滅する作戦の道中での出来事
ある兵士が心臓に撃ったのに平然と近づいてくる
手榴弾で吹き飛ばしたのに生きている
腸を垂らしながら歩いてくる
まるでゾンビのようだったと
慌てた各隊長と指揮官は現場の撤退を指示
その後身体検査などを理由に参加部隊の隔離
敵拠点周囲に攻撃ヘリを展開し動くモノは
ミサイルか機関砲でミンチにした
完全な撤退が確認されると
爆撃機による絨毯爆撃が実行された
存在の隠ぺいと感染源の根絶だ
だが実際はこの有様だ

兵士「中佐！班長という方から準備良しとの報告が……」
「わかった、全部隊に作戦開始を伝達」

兵士「了解！」

私は手元の愛銃の安全装置を外す
部下達も準備はできているようだ
他の輸送ヘリの連中もやる気十分だろう
すると近くから多数の機関砲の音が聞こえてきた
護衛の攻撃ヘリから機銃掃射だ
まずこれで降下ゾーンと周辺を掃除する

「いいか！アレはもう人間ではない！それに噛まれたらもう家に帰れない！死ね！」
部下達『はっ！』
「死にたくないなら戦友を守れ！自分を守れ！そして任務を終え総隊長と共に家に帰るぞ！」
部下達『了解！』
コブラ『こちらコブラ1、第一射掃討完了、降下ポイント確保』
「こちらデーモンこれより降下を開始する」
コブラ『了解した死神の部下の力見させてもらうぜ』

「既に死んでる人間など我々の敵ではない」
コブラ『そうか、グットラック』

ロープをフックで固定し一度下を確認する
動く死体は見えない
あるの肉片のみ
私は部下達を見る
口ではもう語らない
ヘリから飛び降りる
着地してサイトを見ながら周りを確認する
さっきと同じ、肉片のみ
周辺はクリアだ
次々と部下達が降りきるのを待つ
そして最後の1人が降りたのを目で確認する

「全体任意に射撃許可、なお生者には発砲を禁ずる、もし噛まれていてまだ生者なら介錯してやれ」

部下達『了解！』
「では行動開始」

まずは目の前の空港職員の頭を撃つ
上では攻撃ヘリの機関砲と
輸送ヘリのドアガンのミニガンが忙しく連射している
その後数時間に及ぶ掃討作戦は化け物の駆逐という結果で終えた
空母から続々と輸送ヘリに乗せられた輸送物資が空港に集められ
一種の要塞と化している
この後艦隊は一旦洋上まで移動し
それと別で硫黄島から輸送機が来る予定だ
第1旅客ターミナルは前線基地本部として
第2旅客ターミナルは避難民用に
国際ターミナル及び貨物ターミナルは
物資搬入用にする手はずだ
だいたいの作業や取り決めも終わり後は待つだけ
……総隊長

早く帰ってきてくださいよ？
我々はいつでも助けに行けます
だけど何故だ？
このよぎる不安は？
私にはそれは何かわからんかった
わかったのは惨事が起きた後だった
今の私はまだ知らない

第13話　決意

やぁどうも拓真です
あれからまた数日が経ち
俺は今、上を見ている
慌ただしく飛ぶ鋼鉄の鳥
ある鳥はひたすら物資を運び出し
ある鳥は避難民を乗せ始めていた
第1中隊と一心会は最後に乗る
俺や孝達とはここで別れる
最初は沙耶やメアリー、明音、冴子だけでもって言ったが……

沙耶「何よ！一緒に行ったら駄目なわけ!?」
メアリー「私はいつまでも先輩といますよ？」
明音「絶対ついて行くに決まってるでしょ！」
冴子「足手まといになるつもりはないよ？」

と、返されてしまった
冴子にいたっては村田刀まで出してきてるし
それを見ていた
中佐含めた第1小隊のメンツや
総帥や奥様、一心会のメンバーが
温かい目で見ていた
一部の人はため息ついてるけど何でだろ？

ジョナサン「索敵班から報告、接近中のマイクロバスを確認」
「……わかった、最後の民間人を送れば戦闘配置だ」
ジョナサン「了解！」

来ているのはおそらく紫藤達だろう
ヘリの大群を見て慌てて来たか？
まぁスパイから連絡がこないのに
救助活動が始まっていたら焦るか

さっきから誰かさんの携帯がうるさいしな
俺はあの時、みんなを纏めるように言った人に近づく
彼が最後の民間人だからだ

男性「今まで世話になりました」
「いえ、あの時は脅してすみませんでした」
男性「いや、あれは仕方がなかったんだ、後で冷静になってわかったよ、あなたは苦渋の決断をされたのでしょう?」
「……さぁ?どうでしょう?」
男性「まぁそんなことはいいさ」
「最後に1つ、このヘリは全て床主国際空港に向かいます、一応避難民用にターミナルを住居にしているようなのでそこで当面住んでもらいます」
男性「わかった、何から何までありがとう」
「道中お気をつけて」

彼がヘリに乗り飛び上がるのを見送ると
俺は後ろに振り返る

そこには整列した第1中隊のメンバーだ

ジョナサン「総隊長、ご指示を」

「奴の始末は俺がつける、各小隊は打ち合わせ通りに各防衛地点に移動待機せよ、第1小隊一心会が脱出するまで援護せよ、質問は？」

ジョナサン「ありません、部隊が退却する際は置き土産にセントリーガンを設置しておきます」

「頼む」

ジョナサン「はっ！お任せください！」

みんなの解散を見計らったからのように沙耶が来た

確か今小室は松戸さんの教えで何かの乗り物の操作方法を聞いているとか

コータは銃の手入れ

他の皆もそれぞれ出る用意をしているはずだ

沙耶「拓真、ちょっといい？」

「どうした？」

沙耶「作戦会議よ、みんな集まってるわ」
「わかった、行こう」

俺は沙耶に連れられてある部屋に入る
そこにはさっきまでガレージにいた孝やコータ
静香やありすちゃんに父親の弘毅さんもいる
当然他の人達もだ

沙耶「最後に確認よ、まずこの中で抜けたい人はいない？」
孝「俺は残る」
コータ「当然僕も残る」
麗「まだお母さん達に会えてないもん、残るわ」
冴子「私も残ろう、なに足手まといにはならないさ」
静香「私も残るわー、医者はいるでしょ？」
「俺は残ると決めている」
明音「なら私も拓真と行くわ」
メアリー「私も先輩と行きます」

希里「私は……」
「希里さん、あなたはここまでです」
希里「拓真君？」
「あなたはここで一心会の人達と共に床主空港に向かってください」
希里「しかし……」
「ここから先は俺達の戦場です、希里さんは空港で俺達を待っていてください、必ず帰ってきます」
希里「・・・・・・・・・」
ありす「パパ？」
希里「……わかった、私達はここで抜けよう」
「すみませんこんな事言って」
希里「気にしないでくれ」
ありす「お兄ちゃん達とお別れなの？」
「いや違うよ、また会えるよ、それまでお父さんとジークと仲良くいい子で待っててね？」
ありす「うん！待ってる！」
「……ああ」

さてこれで参加メンバーは
孝・麗・コータ・沙耶・冴子・静香
俺と明音・メアリー
希里さんとありすちゃん。ジークはここで一旦別れる

沙耶「じゃあ次、今後の方針だけど……」
孝「俺のお母さんと麗の両親を探して救出する」
「その後迎えのヘリに乗って脱出するって事でいいな？」
沙耶「そうね、じゃあ決まった所で……」
ジョナサン「総隊長！今よろしいでしょうか？」
「なんだ？」
ジョナサン「高城総帥がお呼びだそうです」
「総帥が？」
ジョナサン「はい、できれば早急にです」
「……わかった、今向かう」

俺は沙耶達に一言告げて部屋を後にする
屋敷の廊下を歩きながら考える
おそらく総帥の話はあれだろうな
そして俺はとある部屋の前に立つ

「総帥、俺です」
壮一郎「入れ」
「はい」

入るとそこには一心会総帥である高城総一郎がいる
だが今回のこの空気は総帥としてではない気がする

壮一郎「この部屋を使うのは今日が最後だな」
「そうですね」
壮一郎「拓真」
「はい」
壮一郎「昔の事だが覚えておるか？」

「はい、沙耶お嬢様の事ですね」
　壮一郎「沙耶で構わん」
「……沙耶との婚約についてですね」
　壮一郎「そうだ、ここでの最後の確認だ、答えを聞こう」
「自分は母親が交通事故で死に父は飛行機で中東を飛んでいる最中に行方不明になりました」
　壮一郎「確かにあの時はひどかった、一時期家臣から外すかという案もあった、だが家臣を続けさせておいて良かったと思っている」
「ありがとうございます、それで答えですが……自分は沙耶の事が好きです、総帥に婚約の有無を聞かれた時から」
　壮一郎「では何故あの時返事をしなかった？」
「自分にはまだ早いと思っていたからです」
　壮一郎「その想いに気付いていながらか？」
「はい、せめて立派になってから返事をしようと思いましたから」
　壮一郎「確かに立派になったな」
「そう言って頂けるとうれしいです、が自分は人間としては最低の男になってしまったようです」

壮一郎「どういうことだ？」
「これ自身に気付いたのは最近です、もしかしたらパンデミックが起きなかったら気付いていなかったかもしれません、自分は複数の女性から好意を持たれています」
壮一郎「それは百合子から聞いている」
「……俺は全ての女性を愛し守りたいと思っています」
壮一郎「ほう？」
「日本の法ならありえないでしょう、しかし今は無政府状態です、法がない以上重婚も問題ない」
壮一郎「そこまでして全員を愛せるのか？」
「愛せます、ただ沙耶1人に全ての愛は捧げないという問題を除いては、です」
壮一郎「ではそれを隅に置いたとしてお前は全てを守り切れるのか？」
「守り切ります、俺の人生を、権力を、能力を、武力を、全てを持ってして俺が死ぬまで守り切ります、ただし簡単に死ぬ気もありません」
壮一郎「このご時世でお前はどこまでやる気だ？」
「何もかもです、化け物を駆逐し平穏な時代を、今は無理でもこれから何十年かけてでも次の世代へ渡します、崩壊した世界を、法も秩序もリセットされたこの世界を、少しでも次の世代に平穏を送らせることができるなら俺はできることをする気持ちです」

壮一郎「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
壮一郎「……ククッ」
「???」
壮一郎「はっはっはっは!!!」
「そ、総帥?」
壮一郎「見事だ!よく言い切った!ほんとに立派な男になったな」
「怒らないのですか?」
壮一郎「そこまで男を見せつけておいて怒るわけない、むしろ誇らしく思う」
「……総帥」
壮一郎「拓真、その言葉に嘘はないな?」
「はい!ありません!」
壮一郎「ならば良し!沙耶との婚約を認めよう、もちろん他の子達もな」
「ありがとうございます!総帥!」
壮一郎「……父と呼んでもいいぞ?」
「え!?い、いきなりですか!?」
壮一郎「駄目か?」

「す、少しハードルが高いかと」
壮一郎「そうか、ではまたの機会にしよう」

あれ？
総帥残念そう？
まさかね
その後、俺はこの後の仕事のため部屋を離れた

sideout

・拓真が退出後の総帥
・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「いつまで悲しんでるんですか？」
壮一郎「……百合子」
「そこまで悲しまなくていいではありませんか」
壮一郎「何も悲しんでなど、むしろ沙耶が幸せになれるなら……」
「拓真君にお父さんって言われたかったのでしょう？」
壮一郎「・・・・・・・」
「急には無理でしょう、これが落ち着いてからまた聞いてみればいいでしょう」
壮一郎「……そうしよう」
「では私は身支度の方に向かいます」
壮一郎「うむ」

全くこの人は顔にあまり出ませんが
拓真に拒否された事にショックだったのね
後で私からも言いましょうか
ついでにお母さんと呼んでもらおうかしら？
フフッ楽しみね♪

第１４話　害虫駆除

さてこんにちは拓真です
俺達は今獲物を待ち構えていた
たった今一心会の人がマイクロバスを入れたらしい
これでいい
あいつがもしこのまま生き残ったら
何を仕出かすかわかったもんじゃないからな

「総帥、予定通り部下達を下げてください」
壮一郎「うむ、警備班及びバリケード防衛班は集合！撤収準備に入る、吉岡点呼を怠るな、全員でここを離れる」
吉岡「はっ！お任せください！」
「中佐、全隊に通達防衛線縮小、警戒レベルを上げろ」
ジョナサン「了解しました！」
「後中佐準備は？」

ジョナサン「できてます、ここにある物は全て対ＥＭＰ処理済みです、しかし」
「わかってる、これらは試作品だ、いくら最終段階のやつでも気は抜けないさ」
ジョナサン「はい、一応空港制圧班と増援の部隊にも配備されています」
「対ＥＭＰ対策改修キットだっけ?名前」
ジョナサン「はい、小型の無線機から大型の戦闘機、ヘリ、戦車、果ては軍艦まで装備可能の代物です」
「最後の試験結果だと至近距離で９０％カットできたって?」
ジョナサン「はい、しかしそれでも２４時間以内の検査が必要です」
「それでもないよりいいさ、ゲームみたいにヘリが落ちまくってほしくないからな」
ジョナサン「全くです、ああそれと、例の件確証が取れました」
「どうだった?」
ジョナサン「はい、羽田空港での最後の管制官の言葉は〝Ｊａｐａｎｅｓｅ　Ａｉｒ　Ｆｏｒｃｅ　Ｏｎｅ　ｔｗｏ　ｔａｋｅｏｆｆ〟です」
「そうか、わかった」
ジョナサン「しかしここ数日の自衛隊無線では首相の話どころか政府関係者が生きている話は聞きませんでした」
「奴の父親は?」

ジョナサン「アレはこれが起きる前に処分しました」
「奴に良い手土産ができたな」
ジョナサン「全くです」
「と、噂をすればだな」
ジョナサン「そうですね、第１小隊着剣！」
第１小隊『はっ！』

俺も完全武装で近づくマイクロバスを待つ
当然ここには完全武装の一心会のメンバー全員がいる
総帥の命令でこれから起きる顛末に手出し無用と伝えられている
第１小隊は中佐含む全員が銃口をマイクロバスに向けている
実は第１小隊だけ中佐に聞かせた内容と同じ録音を聞かせた
反応はやはり中佐と同じ
違いは５０人分の殺気はヤバいということだけ
応対は吉岡さんがしてくれている
そして後はこちらに託される

吉岡「まさかこのような時に紫藤代議士のご子息をお助けすることになるとは!!まぁこの有様では選挙どころでは有りませんが」
（そもそも本人もうこの世にいないけどね）
紫藤「かまいません、今の私は一教師にすぎませんから」
吉岡「たいしたものですな！学校から生き残った生徒さんたちを連れて脱出されたとは!!」
紫藤「当然ですよ、教師の義務です……」
吉岡「流石お父上の薫陶の賜物ですな！」
紫藤（そんなわけ……あるはずありませんよ）
（ああ、本当薫陶の賜物だよ、悪い意味でな……ん？ッ!?やばっ！）
紫藤「こちらも大変な事はわかっていますが……え？」
麗「随分とご立派じゃない、紫藤せ・ん・せ・い？」
紫藤「み、宮本さんご無事で何より……」
ジョナサン（総隊長!?）
（誰も動くな！待機だ）
ジョナサン（し、しかし！）
（ヤバくなったら俺が処理する）

ジョナサン（……了解）

俺は失念していた
麗が紫藤を恨み、憎んでいる理由を
彼女は今紫藤に言っているが
紫藤は父である紫藤議員の命令で
麗を留年させた
その頃俺も奴の雇われた殺し屋に襲われたが
全員返り討ちにして殺した
ついでに事情を聴いて
後は国連情報部が動いた
というか当時はＣＩＡやＦＢＩも合同で捜査が行われた
（まぁおそらく彼（ギル大統領）の仕業だろうけど）
結果出てくる出てくる真っ黒な証拠がボロボロと
その中に生物兵器の関与があった事がわかって
中東での作戦に発展するが
まぁ今はいいか

大事なのは麗だ
ここで奴を殺すか？
殺してもいいが引きづられないか？
俺は見守る事しかできない
これは麗の問題だから

麗「あんたなんか……言われたくないわよ!!」
壮一郎「ならば殺すがいい！」
紫藤「・・・・・・！」
麗「・・・・・・」
壮一郎「その男の父親とはいくらか関わりがある！だが今となっては無意味だ！望むなら殺せ！」
孝「くっ！……ッ!?冴子さん！」
冴子「宮本君は自分で決めねばならない」
「おい！」
兵士「はっ！」
孝「拓真！」

「俺達は手出しできない」

紫藤「いいでしょう……殺しなさい！私を殺して命ある限りその事実に苦しみ続けるがいい！それこそが教師である私が生徒のあなたに与えられる最高の〝教育〟です!!」

（嫌な教育だな）

ジョナサン（全くです）

全員『・・・・・・・・・』

皆が見守る中

麗は黙ったまま

俺は麗を信じている

だが麗を知らない部下達は今にも安全装置を外しそうだ

しばらくの沈黙の後

麗は銃剣を下げた

まずは一息だ

部下達も安心しているようだ

壮一郎「……それが君の判断なのだな？」
麗「殺す価値もありませんから」
壮一郎「はっはっは！それもまた良し、流石拓真が好いた女だ」
麗「え？それって……」
「総帥、変な事言わないでください！」
壮一郎「む、しかしだな」
「お父さんって言いませんよ？」
壮一郎「さっきの事は忘れよ！」
麗「え？え？え!?」
明音「あーこれは」
メアリー「決まりましたね」
冴子「決まったな」
沙耶「当然ね！」
静香「青春～」
コータ「流石だね拓真」
孝「何これ？」

俺が知りたいわ！
とりあえず総帥に部下達を下げてもらう
上では無線越しに話を聞いていたヘリの連中が
機関砲と機銃を紫藤と生徒達に向ける
第1小隊の連中も構え始める

「では改めて、久しぶりだな紫藤」
紫藤「だから先生をつけなさいと……」
「喜べ、お前の父親はこのパンデミックが起きる前に死んだ」
紫藤「はぁ!?」
「お前もあの日殺す予定だったんだがな、まぁここで殺すから問題ないな」
紫藤「先ほどの話を聞いていなかったのですか!?私を殺せば罪悪感であなたは一生苦しみますよ?」
「それはないな」
紫藤「何故言い切れるんです!?」
「お前より悪い奴も良い奴も殺してきたからだ」
紫藤「なっ!?やはりあなたは人殺しだったんですね！」

「ああ、人殺しさ、だからさ……苦しんで死ね」
紫藤「え？……ガッ!?」

俺は手元の拳銃で紫藤の胸、正確には肺を撃ち抜く
紫藤は一瞬呆けてから前のめりに倒れる
こいつにはそう簡単に死んでもらうわけにはいかないからな
さてこいつらは……
……無理だな、頭がオカシクなってる
まぁ俺も大概狂ってるか

「小隊安全装置解除、国連非常時対策法に基づき彼らを敵性組織と断定……全員射殺せよ」
ジョナサン「了解しました！総隊長の命令を実行せよ！」
第１小隊『はっ！』
「攻撃ヘリ部隊は逃亡者を射殺せよ」
サクラ『サクラ各機了解、いつでもいけます』
「撃てぇ！」

俺の横から多数の銃弾が飛んでくる
その先にはまだ状況を理解できていない生徒達に向かう
ある者は頭を撃たれ訳も分からず死に
ある者はバスに縫い付けられるように撃たれ死に
ある者はなんとか銃弾から逃げ切るがヘリの機関砲でミンチにされた
立ってる者がいなくなると俺は射撃をやめさせる
彼らの死体に近づき頭に一発ずつ撃ち込む
これはあくまで保険だ
《奴ら》になってほしくないからな
一部は生きているらしく命乞いをしているが
どうせ助からないから早々にあの世に送る
全員の頭に鉛玉を撃ち込み終えると
今も苦しんでいる紫藤に近づく
その一瞬俺はみんなを見る
一心会の人達は俺の見る目は変わっていない
事前に総帥と奥様に話し全体に伝えてもらっているからだ

だが孝達は違う
一応言っておくがありすちゃんは希里さんとジークと家の中にいる
希里さんは元従軍記者だから問題ない
一方孝はものすごく睨んできている
気持ちはわかるつもりだ
これは普通じゃない
でもこうしないといけないんだ
罪は一生背負う
まぁ紫藤の命の罪はドブに捨てるけど
コータは何故か理解している顔だ
静香は今にも泣きそうな顔をしている
いや泣いているかもしれない
すまない
そして彼女達
冴子、麗、沙耶、明音、メアリー
皆悲しい顔をしている
わかっているつもりだった

こんな事しなくてもいい
バスを追い返せばいい
空港に連れていって拘束すればいい
だが今の状況では無理だ
バスはもう出せない
空港は今他の避難民がいる
暴動の元になるかもしれない
だからここで殺すしかなかった
仕方がない
そう割り切るべきだ
・・・・・・
きっと俺は……

紫藤「地獄に落ちろ！化け物め！」
「……まだ話せたのか、紫藤」
紫藤「私は知っているんだ！お前が中学時代にした事を！」
「中学？ああ、あの事か」

紫藤「あの時のお前の顔はまさに化け物だった！」
「そうか、確かに俺は化け物かもな」
紫藤「なら一生苦しめ！自分の仕出かした過ちに押しつぶされて死ね！」
「ああ、苦しむかもな、だけどお前の命で苦しむことはないな、絶対」
紫藤「やはり化け物だな！お前……ガッ!?」
「もういい、静かにしろ」
紫藤「～～～～～ッ！」
「これでお互い様なんだよ紫藤、お前は宮本一家を苦しめ俺は殺し屋を送られた、その結果お前の父親は地獄を見る前に死にお前もここで退場だ、良かったな地獄から解放されてまぁ死んでもお前は地獄だろうけどな、もし俺もそっちに行ったら仲良くしようぜ」
紫藤「き、貴様!?」
「死ね」

最後に紫藤の頭を撃ち抜き絶命させる
最後の奴の死に顔は憎悪に塗れた顔だった
上の連中もそろそろ燃料がヤバいだろう
俺は無線機に手をかけようとした時

急に視界が回転した

「……え？」

明音「拓真!?」

メアリー「先輩!?」

ジョナサン「彼を抑えろ！」

孝「クッ話せよ！」

冴子「孝、何を！」

麗「嘘、孝……」

沙耶「あんた何をしてるのかわかってんの!?」

静香「大丈夫!?」

「え、ええ大丈夫だと思います」

俺は起き上がり孝を見る

彼は今兵士に腕を固定されている

振りほどこうとしていたが

相手は正規軍人、無理だな

孝「何でだ拓真！」
「何がだ？」
孝「何故あんな事をした！」
「必要な事だからだ」
孝「学校の仲間を殺すことがか!?」
「うるさい！お前にわかるか!?殺されるかもしれない恐怖を！殺した時のへばり付く罪悪感を！頼る相手もいない、拠り所を失った俺の気持ちがわかるか!?え!?ずっと学校サボってた不良が戦場という狂った日常を送った俺に文句言うんじゃねぇ！」
孝「た、拓真」
「はぁはぁ、おい、放してやれ」
兵士「し、しかし！」
「放せ」
兵士「り、了解」
孝「あ、ありがとう拓真」
「礼はいらん、だがこれだけはよく聞け」
孝「何だよ？」

「俺はお前とは生き方が根本的に違う、そこだけは覚えておいてくれ」
孝「……わかった」
「ならいいんだ」

俺は起き上がり体調を確認する
痛いのは頬だけのようだ
想いっきり殴られたらしく
割と痛い
昔教官に殴られた時よりはマシだけど

ジョナサン「総隊長！大丈夫ですか!?」
「大丈夫だ、それよりアレラの死体の回収を……」
ジョナサン「？どうかされましたか？」
「いや中佐死体の回収は良い」
ジョナサン「それはどういう……ッ!?あれは！」
「地獄の黙示録でも見てる気分だ」

俺達は空を見上げた
かなり高高度だろうその光は
その範囲のあらゆる電子機器を破壊するだろう
ここからは本当の暗闇が始まる
少なくとも俺は思った

第15話　日本の終わり、脱出

空に光るあれはあらゆる電子機器の天敵
高高度核爆発による電磁パルス攻撃！
通称ＥＭＰ
誰かが核弾頭を高高度で爆発するようセットしたんだ
撃った奴は《奴ら》になったか
逆に核弾頭食らってるかだな
……ある意味で幸せなのかもな
正直今の状況なら死んだ方が幸せなのではないか？
時々思うが
だが俺達はまだ死んでないし
《奴ら》になってない
なら足掻いてみるか

「サクラ及びキャリア、全機無事か？」

サクラ『こちらサクラ全機問題なし』
キャリア『こちらキャリア、異常なし』
「キャリアは最後の避難民及び部隊の回収を始めろ！」
キャリア『了解！』
「中佐、正門以外の全ての門を閉鎖させろ、置き土産は忘れるなよ？」
ジョナサン「了解しました！」

総帥は部下達を集め始めていた
松戸さんは静香と孝を連れてガレージに向かった
他の皆も詰め込む荷物を車に乗せるため準備する
基本装備は変わらず
弾薬と手榴弾、閃光弾、Ｃ４爆薬とかをもらった
輸送ヘリが高度を落とし始め
まず一心会の荷物の積み込みを始める
次の部隊や実家の物
その後一心会とありすちゃん達を乗せて
最後に第１中隊が脱出する

俺達は車に乗ってここから去る
だが不幸はこれだけではなかった

兵士「所属不明機接近！」
「どこだ？」
兵士「あちらです！」

俺は中佐と一緒に言われた方を見る
そこにはフラフラしながら降下してくる航空機が来ている
ＥＭＰを受けて墜落しているのか？
その割には安定して高度を落としているな
いや待てよ!?
あれって……

「中佐、あれってまさか……」
ジョナサン「そのまさかですね、日本の政府専用機」
「ジャバニーズエアフォースワンか？」

ジョナサン「おそらく、しかしそうなるとツーはどこに？」
「いや、逆にあれがツーかも」
ジョナサン「何故そう思うんです？」
「自衛隊の特別作戦群の隊長クラスと一部将校しか知らない事だけど非常事態発生時、日本が危険な場合天皇陛下や首相を国連が保有する施設に避難することが許されている、が……」
ジョナサン「優先度はその天皇陛下が最優先と？」
「ああ、英国の女王陛下と同じと思えばいい」
ジョナサン「わかりました、それと関係が？」
「空港の無線情報が本当ならワンなら今頃太平洋だ、だからツー、それに現在政府機能の移転に持って来いなのは本島以外の島」
ジョナサン「北海道、四国、九州ですか？」
「ああ、距離的近いのは四国だと思うからそっちに行くはず」
ジョナサン「それで道中ＥＭＰの攻撃を受けたと？」
「それ以外に考えある？」
ジョナサン「ないと思います」
「たださっきから様子が変だ」

ジョナサン「それの答えはあれではないですか？」
「ん？……ああ、もう日本は駄目だな」

そこには専用機の窓に見える血の海だ
殆どの窓が血で見えない
パイロット席を覗くと
半分ほど血で濡れており
もう半分にはパイロットの顔がある
ん？あいつ生きている？
でも何している？
あの人の側頭部にあるのって銃？
まさか！
だが時は既に遅く
残りの半分の窓ガラスも血に染まった

「・・・・・」
ジョナサン「最後の時が1人とは悲しいものです」

「……そうだな、ん？不味い!?」
ジョナサン「どうしました？」
「あの高度だとこのままだと高圧電線にぶつかる!?」
ジョナサン「ッ!?直ぐに攻撃ヘリに攻撃を……」
「いや遅い、だが退避はさせろ！」
ジョナサン「空中待機中の全機は緊急退避！飛行機が突っ込んでくるぞ！」
サクラ『ッ!?サクラより全機！滞空止め回避機動！』

慌ててヘリが遠のき始める
専用機は俺が言った通り電線にぶつかり機動を変える
こちらよりにだ

「総員正門より退避！こっちに来るぞ！」
ジョナサン「退避！退避！」
「スティンガーないのか!?」
ジョナサン「化け物に撃たないもの持ってくるわけないじゃないですか!?」
「ですよねー」

ジョナサン「ですが、思ったより手前に落ちそうです」
「いや、悪い所に落ちるぞ」
ジョナサン「え？」

次の瞬間少し先で轟音と爆発が起きた
その炎は横一線に延び周囲を燃やしだす
願わくばあの機体に生者がいませんように

壮一郎「拓真、あの辺りには……」
「一心会の作ったバリケードの真上です」
ジョナサン「じゃあ！」
兵士「ッ!?て、敵襲！大破したバリケードから多数侵入！」
ジョナサン「総員迎撃戦用意！目標を見つけ次第射殺せよ！」
「中佐は他の様子は？」
ジョナサン「各小隊既に集まっています、物資もほぼ全て詰め込みました」
「総帥！一心会の人達を連れて早く乗ってください！」
壮一郎「私に逃げろというのか！」

「我々の作戦の成功は全員の脱出です、殲滅では有りません！」
壮一郎「しかし……」
「別れの時間はまだありますから！」
壮一郎「……わかった、ここを頼むぞ」
「全力を尽くします」
壮一郎「各班点呼のち搭乗！全員欠けるな！」
一心会『はっ！』
「第１，２，３小隊、正門を死守！他はヘリパットを守れ！」
第１中隊『了解！』
「静香、孝、乗り物をいつでも出せるようにしとけ！」
静香「わかったわー」
孝「わかった」
「他のメンバーは乗り物を基点に防衛、沙耶は総帥の所へ」
沙耶以外『わかった』
沙耶「何で私だけ？」
「別れを済ませて来い、俺も後から行くから」
沙耶「ッ!?……わかったわ、待ってるから」

「希里さんは総帥と同じヘリへ！」
希里「わかった！」
ありす「お兄ちゃん！絶対帰ってきてね！」
「おう！ジーク、2人を頼んだ」
ジーク「わん！」

その後大量に来る《奴ら》に俺は銃で応射する
周りでも第1中隊の連中が各々の武器で撃ち殺し始める
上ではサクラの攻撃ヘリ部隊が機関砲でミンチに変えていく
地上ではセントリーガンや銃の一斉射撃で風穴地獄である
だけど1つ問題があった
《奴ら》は痛みを感じない
《奴ら》は頭以外を撃ち抜いても平然と来る
《奴ら》は感情すら湧かない死人
小銃や拳銃なら頭を撃ち抜けるが
機関砲やセントリーガンはそうはいかない
何よりもいくら戦場を慣れた軍人でも

化け物は経験がない
中東ではここことは別の部隊が担当した
何が言いたいかというと……

兵士「大隊長！数が多すぎます！」
ジョナサン「文句より引き金を引け！」
第２小隊長「ですが彼の言う通りです、ミサイルによる空爆を要請を！」
ジョナサン「まだだ！最後の避難民を上げないと攻撃できない！」
「中佐、攻撃ヘリによる空爆を要請しろ！」
ジョナサン「し、しかし！」
「俺達の事は構うな、やれ」
ジョナサン「了解、ウルフよりサクラへ、航空支援を要請する」
サクラ『こちらサクラ、いいのか？』
ジョナサン「総隊長の許可は取ってある、やってくれ」
サクラ『了解、攻撃を開始する！』

無線の終わりとほぼ同時に多数のミサイルが《奴ら》に降り注ぐ

着弾した所から爆発と轟音が起き
《奴ら》を吹き飛ばす
騒音が収まると立っている《奴ら》は少なくなり
処理がしやすくなった
ただ対価として攻撃ヘリの空爆チャンスがなくなった
護衛に来たのは１０機
５機は既に帰路についた輸送ヘリ部隊の護衛についている
残りの部隊の弾薬の損耗を考えると
できるのは後１回だけだった

ジョナサン「総隊長、今の内に行ってください」
「まだ《奴ら》がいるが？」
ジョナサン「これぐらい我々でもいけます、それよりも早くご両親に一言告げて来てください」
「……わかった、ここを頼む」
ジョナサン「了解！」

俺はその場を離れヘリポートへ向かう
そこには避難民を乗せた最後のヘリが離陸待ちをしていた
乗っているのは父さん、母さん、吉岡さん、弘毅さん、ありすちゃん、ジークだ

沙耶「拓真！遅かったじゃない！」
「すまん、《奴ら》の数が多すぎた」
沙耶「今は大丈夫なの？」
「大丈夫だ……弘毅さん」
弘毅「ッ!?何だい？」
「あなたを助けれた事誇りに思います、情報提供ありがとうございます！」
弘毅「お礼を言うのはこちらの方だ、助けてくれてありがとう」
ありす「お兄ちゃん！絶対無事に帰ってきてよ！」
ジーク「わん！」
「ああ、わかってるさ、ジークもありすちゃんを頼む」
百合子「拓真」
「母さん、道中お気をつけて」
百合子「絶対生きて、無事にみんなと帰ってくるのですよ」

「はい」
壮一郎「・・・・・・・」
「総帥？」
壮一郎「・・・・・・・」
「……父さん？」
壮一郎「ッ！……なんだ？」
「必ず帰ってきます」
壮一郎「……男の約束だ、破るな！」
「はい！」
吉岡「お気をつけて、若様」
「若様はやめてくださいよ、吉岡さん」
吉岡「次期総帥になる方なんですからいいではありませんか」
「それはこれが終わってから話しましょう」
吉岡「そうですな」
「父さんと母さんを頼む」
吉岡「もちろんです」
「彼らを絶対に空港まで送り届けろ！」

パイロット「はっ！では離陸します」
「ああ！」
壮一郎「拓真！」
「……父さん？」
壮一郎「絶対生きて戻れ、息子よ」
「……はい、絶対に！」

俺は輸送ヘリから離れ
沙耶とヘリの方を見る
ヘリは徐々に高度を上げ
前へ進みだす
沙耶を何か言おうとしたが
俺に抱きつき我慢していた
俺はそんな沙耶の背中に腕を回しながらヘリを見送った
雰囲気は良さそうだが
残念ながらここは戦場
沙耶にはみんなの所に戻ってもらい

俺は中隊の方に戻る
戻った俺が見たのはある意味日本の終わりだった

「やっぱりツーの方だったな」
ジョナサン「……でしょうね」

目の前には燃えながら近づく《奴ら》
だがその顔は見覚えがあった
それは日本国の首相や大臣達であった
全員白目を剥き
体のどこかしらは欠損していた
まぁ燃えながら来てる時点でおかしいけど
俺は持っていた銃を構え全員に鉛玉を撃ち込んだ
どちらにしろ
彼らは既にモノに成り果てた
者ではないなら処分するしかない
それに今の日本にコレラは必要ない

「中佐、彼らの死亡証拠を写真で収めろ」
ジョナサン「了解」
「これより撤収作業に入る！セントリーガンの数を増やせ！」
ジョナサン「了解！第５小隊は撤収作業開始！」
第５小隊長「了解！総隊長、ご武運を！」
「ああ！」
ジョナサン「……本当によろしいので？」
「友人が両親を助けたいと言っているのに手伝わない友人はいないだろ？」
ジョナサン「そうですね」
「ジョナサン、これまでの支援感謝する」
ジョナサン「ッ！……閣下、ご武運を！」
「……ああ、必ず俺達の家に戻る」

彼は最後に頭を下げてから作業に取り掛かり始めた
俺は孝達の所に行く
そろそろここを離れるからだ

孝「拓真！」
「そろそろ、ここを離れる準備しろ、乗り物の内訳は前回と一緒だ、コータと明音は車上から援護、コータはやりにくいが頑張ってくれ」
コータ「わかった！」
明音「任せなさい！」
「メアリーと孝は俺が乗り込んだら出発できるようにエンジンは掛けといてくれ」
孝「任せろ！」
メアリー「わかりました！」
「冴子と麗も車内で待機だ、よほど危険と思わない限り接近戦はするな」
冴子「心得た」
麗「わかった」
「静香と沙耶は周りを見て状況判断でみんなに指示を出してくれ」
静香「わかったわ～」
沙耶「任せといて！」
「じゃあ、俺は彼らの様子を見て来る」

俺は彼らの様子を見に持ち場に戻ると
半分以上は避難できたようで
今第２小隊が撤収中だ
《奴ら》の数もかなり減っており
ほとんどがセントリーガンで対応できている

「順調か？」
ジョナサン「はい、今第２小隊が乗り込み完了しました」
「そうか、ここで一旦お別れだ」
ジョナサン「総隊長、無事の帰還を祈ります」
「ありがとう、気を付けて空港に向かってくれ」
ジョナサン「第１小隊撤収だ！」
第１小隊『はっ！』

俺もみんなの所に戻る
後ろからヘリのローター音が遠ざかって行った
俺はハンヴィに乗る

孝は松戸さんからもらった水陸両用車に乗っている
先頭を孝達に行ってもらい
その後に俺達が続く
移動し始めてすぐに車体が一瞬上がり何かが潰れる音がした
後ろを見ると
通ったであろう場所には
頭が潰れた紫藤の遺体があった
・・・・・・・
おそらくわざとだろう
メアリーをチラッと見るが
何故かスッキリした顔だった

第１６話　囮

高城家の屋敷を出て
俺達はいま国道にいる
先に言っておくと前話からそうだが
床主市はＥＭＰ＝電磁パルス攻撃を受け
ほとんどの電子機器が死んでいる
何が言いたいかというと……
国道に入って目の前に広がるのは
ゾンビ、ゾンビ、ゾンビである
しかもこちらに来ている
唯一音を出している俺達に
まぁ……

「当然だよなぁ」
沙耶「そうね、あの電磁パルスの後だもの！私達だけよ唯一のエンジン音を出してる

の！」
　静香「これからどうするの？」
「孝、何か提案はあるか？」
　孝「悪いけど僕と麗の親探しに付き合ってもらう！俺達の家、東署、新床第３小学校の順に行く、ここからなら２時間もかからない！」
「だけど国道がこれじゃあ無理だな」
　明音「じゃあどうするの？」
「二手に分かれる、メアリーエンジン切って」
　メアリー「はい」
「荷物をこっちに、終わったらみんなもこっちに乗り換えて」
　沙耶「何するつもりよ？」
「俺が囮になる」
　沙耶「はぁ!?」
　メアリー「無茶です！」
　明音「そうよ！」
「何も死にに行くわけじゃない、近くにショッピングモールがあるだろ？あそこで合流だ、そこでもう１人来てほしい……冴子、頼めるか？」

冴子「ッ!?心得た」
「よし、孝、麗、お前達でモールまでみんなを案内しろ」
孝「わかった」
麗「・・・・・・」
「絶対帰ってくるから、それまでみんなを守ってくれ」
麗「……はぁ、わかったわよ」
「すまん、俺達が《奴ら》を引き付けるから、落ち着いたら移動してくれ孝、みんなを頼む」
孝「ああ……」

俺は冴子を後ろに乗せる
ハンドルを握り感触を確かめる
元はバイクと似ているとの事だったので問題ない

「じゃあ行ってくる」
メアリー「先輩、ご武運を」
明音「必ず戻ってきてよ!」

「わかってるって」

俺は盛大にエンジン音を出す
一方ハンヴィの方はエンジンは切っているので
《奴ら》は俺達の方に来る

「行くぞ！」
冴子「承知！」

速度を《奴ら》より少し早めで走り出す
分かれ道から出てくる《奴ら》に気を付けながら進む
冴子も周りを警戒してくれるから助かる
そして川の近くまで来て改めて周りを見てみる
・・・・・・・・・
あれ？思ったより多いな

冴子「思ったより多いとか思ってないだろうね？」

「確かに多いとは思いましたが引き付けれたと思えば作戦は成功です」
　冴子「君ならそう言うと思ったよ」
「そうですか、では行きますか！しっかり捕まっててくださいよ！」
　冴子「心得た！」

　俺は坂を駆け降りる
　当然《奴ら》も来るが……
　盛大に転がっていく
　一部は頭から落ちたためか
　首が変な方向に向いてそのまま動かなくなったり
　足が折れてまともに歩けなくなったりした奴もいる
　まぁこれは作戦の副産物の成果かな？
　だけどこのままじゃ……

「無理だよなぁ」
　冴子「そう都合よくはいかんさ」
「じゃあ次やりますか」

冴子「何をするのだね？」
「こいつは水陸両用、ならやることは1つ！」

俺は前へ進み川へ飛び込む
ただここで誤算が起きた
思ったより水飛沫が来たこと
顔面に思いっきりかかり
慌てて冴子の安否を確認する

「冴子！大丈夫、カッ！」

さっきも言ったが俺は水飛沫を受けた
それは後ろの冴子も例外ではない
何が言いたいかというと……
濡れた冴子の制服は透けており
色々見えている
何がとは言わない

俺は理性を抑え水上を動く
この川の真ん中辺りには中州がある
そこに上がりエンジンを切る
《奴ら》は俺達を探して辺りを見渡して（視覚はないけど）いたが
音がないためまたその辺りを彷徨いだした

「何とかなったな」
冴子「中州を使うとは考えたな」
「これなら流されないからな、とりあえずの様子見だけどな、それと冴子これを……」
冴子「？これは？」
「そのままだと風邪ひくぞ」
冴子「……ありがとう拓真君」
「俺は後ろを向く、できれば早く着替えてくれ」

俺は後ろを向き今後を考える
みんなには１日中には合流するとは伝えているからいいが

流石にここで夜を明かすのはまずい
後、後ろで冴子が着替えてるので理性との勝負だ

冴子「もういいよ」
「そうですか、それで今後……なの……」
冴子「？どこか変だろうか？」
「いえ、似合ってますよ、ええ、これ以上ないくらいに」
冴子「？どうかしたのか？」
「何でもありません！」

あれ、ブラ着けてるか？
着けてるって言ってくれ！
人選間違えた？
いやあってる
冴子の天然のせいか？
いや人のせいにするのはよくないな
だとする俺自身か？

・・・・・・・

……ありえるか

少なくとも俺は冴子の事は好きだしな

惚れた弱みか？

意味違うかな？

まぁいいか

うん、頑張れ！俺の理性！

冴子「拓真はいつも私を女と見てくれるのだな」

「逆にあなたを男と見てる男性がいたらそいつはきっと同性愛者（ホモ）だと思うよ」

冴子「そのようなものなのか？」

「ええ、少なくとも俺はそう思う」

冴子「・・・・・・・」

「……そういえば昔気になっていたんだけど」

冴子「なんだい？」

「冴子って好きな人とかいたの？」

冴子「唐突だね」

「嫌だったか？」
冴子「そうではない、ただ君でも恋愛に興味があったのだなと思っただけだ」
「失礼な、俺にもあるよ、で？答えは？」
冴子「いたよ、私にも好きな男が……」

俺達は途中で会話を終え
川を渡り始める
今度は国道を使わず脇道に入る
住宅街に入り俺は目的地に向かう
当然だけど《奴ら》は増える一方だ

冴子「これでは中州の時と変わらないではないか！」
「次の角を曲がれば目的地だ！」
冴子「あれは……公園？」
「あそこにはアレがあるはず！」

公園に入ると目の前に噴水があった

俺は躊躇わずに噴水に飛び込む
残念ながらまた水飛沫が上がる
当然冴子にもかかる

冴子「君は女を濡れ鼠にする趣味でもあるのかね!?」
「最近ありかもって思ってきた!」
冴子「・・・・・・」
「冗談です、バックパックからテープを取ってくれ」

俺は冴子からもらったテープをハンドルに巻く
さしてハンドルから手を放す
乗り物はひたすら噴水の周りを回りだす
盛大にエンジン音を出して

冴子「なるほど……音で引き寄せてその間に」
「東側に出口がある、そこまでは刀だけでやりきるぞ」
冴子「承知した」

先に冴子が飛び次に俺が飛ぶ
着地と同時に見る光景に美しさを感じた
冴子は次々と《奴ら》の首を刎ねていく
頭の無くなった《奴ら》は倒れていく
一部は飛びすぎて噴水に落ちていった

「相変らずヤバいな」
紅桜『私達も負けてられないわね』
「全くだ、行くか」
紅桜『ええ、素敵な剣舞を期待するわ』
「期待に添えるよう頑張る！」

俺は駆け出す
まず目の前の３体
横一閃、首を飛ばし次に向かう
しばらく切り続けた

本当ならさっさと出口に向かうべきだったが
思ったより《奴ら》が多かったこともそうだが
俺自身が八つ当たり気味だった事だ
今まで何人の犠牲の上でここに立っているのか
本当に彼らが死ぬ必要があったのか？
今思えばそれが正しかったのかも怪しい
だけどもう過ぎたこと
終わったことなんだ
なら俺はその罪を一生を懸けて償うしかない
ふと冴子の方を見ると刀を振り上げたまま固まっていた
目の前には小学生の《奴ら》
不味い!?
このままだと彼女が危ない！
俺は慌てて駆け寄る
小学生の《奴ら》は小さな口を既に開けている
刀じゃ間に合わない!?
俺は脇にしまっていた拳銃で小さな《奴ら》の頭を撃つ

先ほどのエンジン音とは比べ物にならないくらいの音が響く

「冴子、走れ！」
冴子「ッ!?」

俺は冴子の手を引きながら走る
公園を出てモールに向かおうとするが
先ほどの音のせいか
《奴ら》の数を多い
悩んでいると目の前に神社に続く階段が見えた

「こっちに！」
冴子「拓真君……」
「とりあえずここで今夜は過ごしましょう」

俺は神社の建物の中に入る
施錠をしっかり行い安全を確保する

俺は振り返り冴子を見る
おそらくあの事だろう
俺はろうそくの灯りから見える彼女を見てそう思った

第17話　欲望と告白

ＥＭＰによってあたり一帯の電気がなくなってから数時間
俺と冴子はみんなと別れ
《奴ら》を誘導、囮に徹した
しかし逃亡途中の公園でトラブルがあり
今は近くの神社の建物の中で籠城している
完全な暗闇の中に１つのろうそくの光が俺達を照らしていた
まるで命が弱弱しく見えるようだ
まぁ実際は噛まれてないし
冴子があの時何故固まったのかは知っているつもりだ

「冴子」
冴子「？拓真君？」
「あんまり気遣えないのだが……これを」
冴子「これは……タオル？」

「血に濡れた冴子も悪くないが気持ち悪いだろうしそれで拭いてくれ」
冴子「ありがとう」

そうして受け取ったタオルで体を拭き始める
といっても主は腕や足で身体自体はそれほど濡れていない
顔に少しついているが些細なものだ
俺も冴子に便乗して血を拭き取る
もちろん紅桜も拭き取る
妖刀にウイルスの入った血など関係ない
普通に吸い取り刀身を紅く鋭くする
ただ本人曰く死人の血は不味いらしい
だいたい拭き終わり一息つくと
冴子が口を開いた

冴子「拓真君」
「何？」
冴子「さっき中州で私に好きな男がいたかどうか訊いてくれたな」

「ああ、悪かったか？」
冴子「いいのだ、私も女だ、男を好きになることもある」
「その様子だと想いを告げなかったか？」
冴子「ああ、告げる資格があるとは思えないのだ」
「冴子ならどんな奴でもいけただろ？」
冴子「……人を殺めかけていてもかね？」
「・・・・・・・」

ああ、あの時の事か
いや普通の人なら根に持ち続けるだろう
俺は気にしないけどな
全く嫌な男だな、俺は
冴子は４年前に夜道で男に襲われた
だが彼女は剣道道場の一人娘だ
剣道の腕は高く当時も木刀を持っていた
そこで彼女は不意を突き
男の肩胛骨と大腿骨を叩き割ってやった

警察には過剰防衛扱いで処理され
冴子を家に帰し
男は逮捕されたことになってる
だが冴子を縛ってるのはそんな安っぽい感情じゃない
明確な敵を得て、圧倒的な力で捻じ伏せる快感
不意を突き相手を倒し切った優越感だろう
そんなもの平和な日本では求めても手に入らないモノだろう

冴子「君は昔から私の道場に通っていたね？」
「ええ、毒島家の技は綺麗だったからな」
冴子「それは嬉しいな、だけど君はあの時の私を見ても通い続けていた」
「当時の自分にとってはその程度だったのさ」
冴子「君の正体を知らなければ怖がっていたかもしれないな」
「それが普通の感情だと思うが、当時の俺からしたら冴子には嫉妬を覚えていたんだ」
冴子「嫉妬？」
「俺の獲物を奪ったことに、さ」
冴子「獲物？あの男がか？」

「ああ、アレは当時紫藤代議士に繋がっていた薬品研究所の関係者だった」
　冴子「あの時に君が私の近くにいたのはあの男をつけていたからだったのか」
「そう、だが実際は思わぬ掘り出し物を見つけてしまった」
　冴子「??」
「お前だよ、冴子」
　冴子「私？」
「明確な敵を得られたことによる快楽、そして圧倒的な力による敵への攻撃の楽しさ」
　冴子「ッ!?それは……」
「それが毒島冴子の本質、４年前から今まで肥大化した欲求」
　冴子「何故そこまでわかるのだ？君はどこまで見てきた？」
「圧倒的な力、人を撃ち殺した瞬間の快楽、弱い人間を理不尽な暴力で殲滅する高揚感、死ぬかもしれない恐怖、それを含めた全てにを俺は欲した、あの日から」
　冴子「あの日？」
「その前に冴子、アレがあの後どうなったかわかるか？」
　冴子「……いや、興味がなかったからな」
「アレは俺が殺した」
　冴子「え？」

「あの場にいた警察官は国連から潜入任務に就いていた者だ、書類上は逃亡中になっていたが俺が尋問して殺した」
冴子「そう……か」
「さて冴子、そこで質問だ」
冴子「拓真？」
「そんな狂った俺は……嫌いか？」
冴子「それは本質を知った上で拓真君の事が嫌いかという事か？」
「そうだ」

本当はこんな事聞くのは野暮だ
だけど俺の女にするなら隠し事は無しだ
この事はいずれ他の人にも話す
いや知ってもらわないといけない
知らずに共に過ごすのはお互いに辛すぎる

冴子「拓真君、さっき私が話した好きな男の話覚えているな？」
「ああ」

冴子「その話には続きがあるんだよ」
「何？」
冴子「私は今日にいたるまで好きな男を変えてなどいない」
「それって……」
冴子「理由はその男の剣の技が綺麗だった、そしてその男の眼が真っ直ぐだったからだ」
「真っ直ぐ？」
冴子「絶対的な意思を感じたんだ、君からね、拓真君」
「自覚はあんまりないけどね」
冴子「それでも私は無意識に君を目で追って気が付いたら好きになっていた」
「それは光栄な事だな」
冴子「だがあの事件の後、君に嫌われないか心配になった、この気持ちを……欲望を受け入れてくれるのか？っとね」
「なるほど、じゃあ仕切り直そう」
冴子「仕切り直す？」

本当は落ち着いてから言いたかったのだけど仕方ない

俺は屋敷を出る前に着替えた元の学ランをしっかり着こなす
そして冴子を俺の正面に立たせて面と向かせる
ろうそくの僅かな光が俺達を照らす
少し見にくいがお互いの顔は見える
俺は深呼吸をする
これ初めて戦場に立った時より緊張してない？

「冴子」
冴子「……はい」
「俺は欲張りな男だ、こんなご時世になった事を良い事に複数の女を俺の女にしようとしている」
冴子「・・・・・」
「それに何より俺は戦う事に、人を殺す事に楽しみを覚えた人間だ」
冴子「・・・・・」
「だから冴子の欲望は俺にとって些細なものだ、だから……冴子」
冴子「はい」
「お前の欲望を俺と共有しろ、俺の女になれ！冴子」

冴子「ッ!?……はい、これからよろしくお願いするよ、拓真」

涙を流しながらOKの返事をした冴子に俺は思わず抱きしめてしまった
冴子も最初は驚いたがすぐに抱きしめ返してきた
だがこれ以上は何もしない
それどころじゃないしね
しばらくしてお互い離れる
離れるのはいいけど、さっきから冴子の顔が真っ赤なのだ
俺も顔が熱い気がする

「と、とにかく今日は寝よう、俺が見張りをするから冴子は寝ろ」
冴子「だがそれだと拓真が疲れないか?」
「一夜の徹夜ぐらいは大丈夫だ、まぁ向こうに着いたら仮眠ぐらいは欲しいかな」
冴子「それなら、交代ですればいいのでは?」
「いや、冴子には英気を養ってもらって朝の突破をしてもらいたい」
冴子「わかった、じゃあお願いするよ」
「ああ、ゆっくり休め」

その後すぐ冴子の寝息が聞こえてきた
そういえば〝あの日〟の事話してなかったな
まぁいいか、みんなと集まった時にでも話せばいいさ
それよりも俺、随分思い切ったなぁ
中々ヤバいセリフも言った気がする

紅桜『中々刺激的で良い告白だと思ったわよ』
「やめてくれ、結構恥ずかしかったんだぞ」
紅桜『良いじゃない、彼女のあの欲望に答えれるのは拓真ぐらいよ』
「それはわかっているし責任も取るさ」
紅桜『ならもう気にするのはやめなさい』
「ああ、そうだな」

その後紅桜話しながら時間を潰し
朝日が見え始め周りが明るくなった所で
冴子とゆっくり外に出る

周りには誰もいなかったが《奴ら》はいた

「うーん、葉音かな?そんな小さいな音でも引き寄せられるのか」
冴子「拓真」
「冴子?」
冴子「私はいつでもいけるよ」
「ああ全く、良い女になったな」
冴子「嫌かね?」
「それどころかさらに好きなったよ」
冴子「では行こうか、拓真」
「ああ、行こう!冴子」

そして俺達は走り出した
視界に入る全ての《奴ら》は獲物だ
首を切り落とし頭のない胴体は蹴とばす
上半身と下半身を分裂させたり
様々な切り方で《奴ら》を殺していく

ある程度減らすと階段を下りてモールを目指す
道に立ちはだかる《奴ら》は即切断する
そうして走っていくとモールの建物が見えてきた
屋上辺りには双眼鏡の反射光が見えた
おそらくコータだろう
駐車場まで来ると冴子が横に近づいてきた

冴子「拓真」
「ん？」
冴子「責任……とってくれるね？」
「上等！」

そういえば冴子がかなり前に進んでいる時に〝濡れるッ〟とか聞こえたんだけど
何だったんだろう？
まぁいいか
とりあえず皆と合流だな
モールに入り皆に出迎えてもらったのだけど……

・・・・・

孝、横でくっ付いてる女は誰だ？

第１８話　新たな仲間

みんなと合流して早1時間
まず俺と冴子の逃亡劇を話し
今は孝の横にいる彼女……有瀬（ありせ）　智江（ともえ）についてだ
俺達と分かれて少し移動した所で《奴ら》に襲われている高校生の集団がいたらしい
《奴ら》の数が少なかったとの事で孝達が殲滅したが無傷なのは有瀬だけで
他の連中は死んだか噛まれていたらしい
事情を聞いている間にそいつらも死んで《奴ら》になりそうな所で処理したとの事
有瀬は行く当てがないので一緒に行動する事になったらしいが
その時助けに来た孝の勇姿（？）に惚れたらしく今まで孝にくっ付いて来ていたとか

「さてと有瀬、俺の事は聞いているか？」
有瀬「ええ、明音から聞いたよ、後私の事は智江でいいよ、私もあなたの事を名前で呼ぶけどいいかな？」
「ああ構わない、さて早速で悪いが智江の両親はどうしてる？」

智江「お父さんは事故で他界してる、お母さんは時間からして家だからわからない」
麗「智江と私の家はご近所だからママと一緒にいるかもしれないわ」
「それなら一緒に助けれるからいいんだけどな、とりあえず今後の方針に変更はないな？」

みんながそれぞれ頷くのを確認すると
ショッピングモールの中を見渡す
コータ曰く出入口は完全に封鎖されており
生存者は約１１名
何故”約”を付けるかって？
このモール広いからね
他にもいるかもしれないじゃん？
で、ここを仕切ってる（仕切り切れていないけど）のは新米婦警が１人
指導していた先輩婦警は本署に応援に行ってまだ帰ってきていない
本署で応援を呼べずむしろ”戻るな”と命令されたか
噛まれて《奴ら》になったか
どちらにしろ、戻ってくる可能性は低いな

それにこの場合危険なのはその新米婦警だ
前者なら警察という組織に絶望する
後者なら警察はまだ信用はできるが助けが来ないという絶望する
確率がほぼ皆無の選択肢としてはその先輩婦警が応援を連れてくること
まぁ今考えても意味がないので俺達は中に進む
まずは使ってる武器を隠す事
これに関しては先に孝とコータが隠し場所を決めていたらしく
そこに隠した
場所について？
・・・・・・・
黙秘権を行使しておこう
少なくとも今は
ただ女性陣から見たら少し冷たい目で見られそうだとヒントを言っておく
それからその生存者達がいる場所まで行くと
何やら騒いでいた
まぁ見た所当てどころのない苛立ちをあの新米婦警に八つ当たりしてるってところかな？

男「あんたは俺達を足止めする権利はないんだ！あるのは俺達を助ける義務だ！」
孝「これは……」
コータ「ダメだね、あの人達」
「ククッ」
コータ「拓真？」
「変なセリフを聞いたなぁって思ったら笑いが出てきたのさ」
孝「？？どういうことだ？」
「いやなに、さっきの男のセリフがおかしくてな」
男「何がおかしいんだ？」
「なんだ聞こえてたのか？」
男「調子に乗るなよ、子供が」
「子供？もう国は死んだのにまだ現実を見ていない大人よりは確かに子供の方がマシかもな」
男「何だと！？」
「あんたさっき言ったよな？〝俺達を止める権利はない〟ってなら出ていけばいい」
男「だが警察は俺達を守る義務があるだろ！」

「あるだろうさ、だけどな？あんただけを守る義務はない」
男「なっ!?」
「あんたは出ていけばいい、警察に止める権利は確かにない、だが彼女はここに残る人達を守る義務がある、違うか？」
男「な、ならみんなでここを出れば……」
「それにその皆は賛成してくれるかな？」
男「そ、それは……」
「フンッその程度の知恵しかないならまだ婦警さんの義務の方が立派だな」
男「クッ……」
「コータ、例の物を婦警さんに渡せよ」
コータ「え？……ああ！あれね！」

察してくれたコータは新米婦警の所である物を渡した
それは警察の制式拳銃のＳ＆Ｗ　Ｍ３７エアウェイトだ
銃を周りに見えるようにコータが婦警に渡す
現代日本で本物の銃を一般人が見ることは少ない
だが婦警はその銃が本物であると証明した

当然だが銃という存在がいかに強いかだけなら一般人でもわかる
だがコータは残弾数が俺らを除く一般人の連中の分しかない
っと伝えている
その意味がどういう意味か
現実逃避気味の大人達は理解したのだろう
俺も昔、教官から聞いた事がある
ある英国の陸軍士官や教官相当の人が
古い銃を使ったり、槍を持っていた
そいつらは兵士や訓練兵が逆らうと容赦なく攻撃した
”俺達はお前らを殺す権限がある”と物理的に教え込むんだ
だがその効果はある
少なくとも隊の規律は保たれる
コータが彼らに言ったのはそういう事だ
だがそれは人を撃つ覚悟のある人間の場合に限る
彼女は警官だ
民間人を守るためにいるわけであって
民間人を撃つ事は仕事柄

もしくが彼女の個人としてもほぼ不可能に近いだろう
それを彼らが完全に理解した時
果たしてここの秩序は保てるだろうか？
さっきからコータの彼女の抑止力を語っているが
沙耶も同じ事を話している
そんな話をしているとメアリーが近づいてきた

メアリー「先輩」
「どうした？」
メアリー「静香先生が見当たらないのですが」
「何だって？」
静香「キャアアアアア!!」
『ッ!?』

俺達は悲鳴の聞こえた方に走る
場所は寝具などが置いているコーナー
そこの１つのベッドで寝かけていたであろう静香先生

で、ベッドの手前で銃を持って近づいてくる男性

「おいやめろ！」

男性「黙ってろクソガキ！」

「黙らない、その人はこちらの大事な仲間だ、手を出してもらっては困る」

男性「ならどうする？俺を殺すか？」

「正直その方が楽だがな」

男性「まるで殺した事があるような口ぶりだな？」

「実際に殺してるからな」

男性「何だと？」

「だから殺してるんだよ、人を」

男性「狂ってやがる、何故笑いながら言える!?」

「それだけ俺が悪魔に魂を売りまくった結果さ」

婦警「何をしてるでありますか！」

男性「あっ？……ッ!?」

婦警「武器を捨ててその人から離れなさい！これは警告であります!!」

明音「拓真！」

「何もするな」
明音「いいの？」
「むしろ今俺達が銃を出すのは不味い、彼女は一応警官だ」

まぁ警察自体も組織として今も成り立っているかは怪しいがな
そんなことより今はあの婦警だ
警告で銃を向けるのはまだいいが
さっきから腕が震えている
あれではもし撃った時に静香先生に当たるかもしれない

「コータ」
コータ「何？」
「その辺の物を使ってアレを無力化してくれ、できれば殺さなくていいもので」
コータ「イエス・サー！」
「明音は一応銃を出せるようにしとけ」
明音「わかったわ」

俺も紅桜で構える
コータはその場を一時去り
みんなで婦警と男性のやり取りを見続ける

婦警「今すぐその人から離れ武器を捨てるであります！さもなければ……」
男性「フッ撃つってのか？ブルってるのに本当に撃てるのか!?」
婦警「・・・・・」
男性「撃てるもんなら撃ってみろ！」
（あっいいの？）
明音「撃っちゃダメよ」
「……どうしてわかった？」
明音「だってあなただもの」
「いや、どう見てもあいつのセリフが悪い」

シリアスとは何か？
そんな出来事起きているが現実はかなりヤバイ
俺は視線をコータが向かった方を見る

そこは工具店
日常なら助かる道具屋だが
非日常で考えるならあそこは一種の武器庫だ
銃器があまりない日本では
ああいう店はある意味宝庫かもしれない
考えている間にコータが出てきた
しかもかなり良い笑顔で
手元に持っているのはワイヤーと取っ手に使われいるであろう金具
彼は即席でできた絞殺武器で男性の後ろに回り込む
次の瞬間男性の首にガッツリとワイヤーが食い込んでいた
男性は取ろうと手を伸ばしているが
食い込んだワイヤーを取れるわけがない

男性「ガッ!?」
コータ「無駄だよ、肉に食い込んでるから外せない」
男性「アガッ!?ガッ！グッ!?」
コータ「で、どうする？お巡りさんの警告に従うか、それとも……ぼくに殺

されるか」
男性「・・・・・・」ゴトッ
コータ「ふんっ！」
「よし、孝は奴を拘束しろ、冴子は静香先生を保護、コータよくやった」
コータ「拓真の指示のおかげだよ」
「そうか？だが工具店に目を付けたのは流石だ」
コータ「えへへ、ありがとう」

男性の方は孝が拘束して
明音が男性が暴れないか監視
冴子は静香先生を無事保護した
コータは素直に褒めたためか
凄くニヤけてる
一方あの婦警さんは未だに銃をおろしていない

婦警「え？え？え？」
沙耶「もうイイし！」

婦警「え？」
沙耶「もう済んだの！終わったのよ！」
婦警「あ、あの！あ、あさみは……」
麗「落ち着いて、彼が助けてくれたから」
コータ「・・・・・」コソコソ（逃亡中
「コータ？」
婦警「コータ……さん」
沙耶「ハァ!?」
明音「彼にも春がは来たのね、展開がどっかの小室と同じに見えるのは気のせいかしら？」
「気にしたら負けだ」
明音「それもそうね」

とにかく一旦はこの状況は終焉を迎えたが
この先の事を思うと頭が痛くなりそうになった

第19話　未来への準備

麗「……で？いつまでここにいるつもりなの？」

あの騒動から少し経ち俺達はモール内のカフェで一休みしていた
婦警さんは他の生存者に状況を説明しに行き
変質者は現在も拘束中だ
麗は店側におり残りはカウンター席に座っている

孝「みんな疲れてるからな……」
麗「ならいつだったらいいのよ！」
明音「確かに麗の言いたい事はわかるかも」
麗「そうよ！たった数日で人前で女性をレ○プしかける奴がいるような場所でどうやって気楽にしろと？あたしも女なのよ!?」
明音「まぁそもそも麗に手を伸ばした時点でその瞬間にはよくて風穴で、悪くて挽肉になるかしらね」

「皆さん、明音の話を聞いた途端俺を見るの辞めてくれません？」
明音「だって事実でしょ？既に冴子には告げたんだし」
冴子「～～～～～ッ／／／／／」
「確かにそうだ、俺の女に手を出したやつの未来なんて決まってる」
沙耶「とにかくよ、宮本、ちょっといい？」
麗「なによ？」
沙耶「アンタ達の目的を果たすには準備が必要、準備には時間がいる！」
冴子「賛成だ、第一に移動手段、それを用いて運べる水と食料の量、通信手段が得られるかどうか、その後で初めて目的地へのルートが決まる」
麗「あたしの家までここから歩いて２０分なのよ！」
「落ち着け麗」
麗「でも！」
「誰もがそれを理解している、でも今の現状じゃ準備無しだと不可能に近い、それは君も理解しているだろう？」
麗「・・・・・・」
「こんなこと言うのはあれだが、絶対俺達で親御さんを助けてやるから」
麗「そこは”俺”がじゃないのね」

「こればっかりはな」

救えるものなら俺1人でみんなを救ってやりたい
でも絶対人には限度がある
なら頼れるのは仲間だけだ
そんな話からコータがＥＭＰの話題を出してきた
確かにＥＭＰは強力な対電子兵器だ
ただ質が悪いのが無差別って事
軍用、民用問わず被害が出る
そのためこの状況ではかなり迷惑である
そもそも核兵器を使うこと自体が問題なのは今更である
一応電波が通じるものがない場所ならチャンスはある
例えば分厚い壁で覆われている金庫やそもそも電子部品を使っていないもの
今後の方針はそれを探すことでいいだろう

「じゃあとりあえず班を４つに分けよう、明音とメアリーは俺と無線機の確認だ」
明音「わかったわ」

メアリー「はい」
「他の女子は銀行とサイクリングショップで使えそうなものを探してくれ、冴子と麗はいざという時は頼む」
冴子「わかったよ、拓真」
麗「わかったわ」
「孝は事務室で電波が遮断されてそうな場所を探してきてくれ、コータは屋上で周囲の監視、できれば逃走経路も探してほしい」
孝「わかった」
コータ「イエス・サー！あっカメラ屋と本屋に寄ってからにするよ、双眼鏡と地図の予備はあった方がいいから」
「わかった、それとここにいる奴らとの線引きだが同じものを求められたら２つある時だけ許可する」
みんなが頷きつつそれぞれ離れていく
俺は先ほど麗が用意したコーヒーを飲み切り
２人を連れて他の生存者の連中から離れた所に行き
背負っていたリュックから無線機を出す

こいつは国連軍指定の無線機で
あの時に対ＥＭＰ処置はしている
だが使えるかは別問題だから
こうして確認することになった

「見た感じは電源は付いてるな」
明音「ほんとその対ＥＭＰ対策改修キットだっけ？すごいわね」
メアリー「そうですね、少なくとも１発は耐えますから」
「しかもこれは至近で受けたわけじゃないからな」

そう言いつつ無線機の調整を続ける
まずは明音やメアリーが持ってる無線機との近距離通信を確認する
それが問題ないなら次にやるのは部隊との遠距離通信だ
俺は国連軍の指定周波数に合わせた

「こちら国連軍所属、神崎拓真だ、誰か応答する者をいるか？」
??『・・・・・・・』

「こちら国連軍所属の神崎だ、付近に展開している部隊は応答願う！」
??『……こちら床主遠征司令部、貴官の識別と階級を述べよ』
「国連軍対バイオテロ対策部隊隊長、神崎拓真准将だ」
通信士官『総隊長!?し、失礼しました！』
「構わない、そこに副官はいるか？」
通信士官『ネイサン准将ですね？少々お待ちください』
（ん？准将？中佐じゃなくて？）
「なぁ明音」
明音「何？」
「これが起きる前の俺の階級は准将だよな？」
明音「そうね、どうしたの？」
「副官のネイサン中佐がさっきネイサン准将って呼ばれてた」
明音「准将？それって戦時特例で昇進したって事？」
「普通に考えたらそうなる」
メアリー「じゃあ私達も階級が上がっていると？」
「多分、君達は少佐だから、大佐って事で」
明音「あなたは准将だから……」

メアリー「中将、ですね」
「それどんなジョークですかね？」
明音「残念だけど９９％現実よ」
「１％の確率のジョークに祈るよ」

最年少の准将への任官が２年前
卒業後は特務少将として司令補佐として扱き使われる予定だったはず
なのに少将を飛び越えて中将とか笑えねぇよ、笑う気ないけど
確かに准将昇進の会議を総司令部でしたと司令から聞いた時は
反対派多そうだなぁって思ってたのに
次に話を聞いたらほぼ満場一致で可決したと
なんの冗談だよって思ったのに……
多分事後処理で中将の件、普通に容認されそう
国連軍、未成年を中将にするとか頭大丈夫か？

ネイサン『総隊長！ご無事ですか!?』
「ネイサン……中佐か？私は無事だが聞きたい事があるんだ」

ネイサン『何でしょう？何でも言ってください！』
「君の階級が准将って先ほど聞いたけど、もしかして俺達の階級も上がってるか？」
ネイサン『当然ではないですか！今近くには光城少佐とドレイク少佐もいますよね？』
明音「はい、います」
メアリー「私もいます」
ネイサン『わかりました、先ほどイギリスで復旧した総司令部より通達です”非常時による戦時特例に基づき対バイオテロ対策部隊所属の隊員に２階級特進を命ずる”以上です！』
「……戦死宣告か何かか？」
ネイサン『いいえ違います、国連軍総司令官とリーアム方面軍司令の連名での命令です』
「わかった、命令を受諾する」
明音。メアリー『了解しました！』
ネイサン『これで晴れて”閣下”と呼べますね』
「１７で”閣下”は勘弁してほしいけどな、それより状況を報告しろ」
ネイサン『はい、現在極東方面軍は日本での掃討作戦を開始しました、他方面の軍も

それぞれ島国やルートが限定されている地域への掃討作戦を開始しています』
「大陸に関してはどうだ？」
　ネイサン『現状、被害が比較的少ないオーストラリア大陸には派遣は決まりました、北アメリカ大陸は米軍が局地防衛から反転攻勢に出始めています、南アメリカ大陸は動きがあまりありません、アフリカ大陸も同様です、一番酷いのはユーラシア大陸で中国及び中東、朝鮮半島、ロシア東部が核攻撃で手出しできません、欧州方面は回復した英軍と国連軍の合同で掃討作戦に入りました』
「報告ありがとう、極東軍の詳細と今後の展開は？」
　ネイサン『現在、北海道、本島、四国、九州、沖縄にそれぞれ展開、本島以外は在日米軍と自衛隊との共同作戦に入ります、本島に関してはここ床主を基点に作戦を展開しますが……』
「が？何かあったのか？」
　ネイサン『地図の状況と偵察機の報告から中継基地の設営地点を決めようとしているのですがまだ決まらず部隊が動かせていません』
「一応いくつか候補はあるが……」
　ネイサン『本当ですか！おい！今すぐ地図を持ってこい！』
「あまり期待はするなよ？」

ネイサン『大丈夫です！問題かどうかは後で確認を取ります！』
「あ、ああ、わかった」

俺は今までここで過ごした経験と土地勘で場所を指示した
まず俺達がはじめにいた藤見学園
それから高木邸に各小中高などの学校、警察署などの公共施設
どういう場所なのか？
防衛面などを俺目線での主観で説明した
最後に俺達がいるモールだ
ここは既に室内はクリア
周りの駐車場の外枠を壁で囲えばヘリの発着場としても十分使える

ネイサン『……閣下』
「何だ？」
ネイサン『これより我々はそのモールに向かいます』
「一応聞くが何故だ？」
ネイサン『まず既に室内はクリアである事です、少なくともすぐに設営にかかれます』

「確かにそうか」
ネイサン『それにそこには民間人もいるそうですね？保護もしなければなりません』
「わかった、気を付けろよ」
ネイサン『お気遣いありがとうございます！総隊長もご武運を！デーモンアウト』
「グリム・リーパーアウト」

さて、思わぬ収穫があったが機器も問題なかった
後はこれをあいつらに伝えなきゃいけないけど
あの婦警をこちら側に招かないといけないな
見た所コータに気があるみたいだし
それに俺も決着つけないとな
そう決意し俺は明音とメアリーを見る

明音「??拓真？」
メアリー「どうかしましたか？」
「明音、メアリー」
２人『???』

「好きだ」
２人『!!?????』
「２人の気持ちに気づけず今更何だと思うだろうけどこの気持ちは事実だ」
２人『・・・・・・』
「だけど、まだ他にも告げなければいけない人達がいる、もちろん２人共欲しい、こんな我儘な男だが一緒について来てくれないか？」
２人『・・・・・』
（なんかこれ、結構クズな発言してないか!?）
２人『……はぁ』
「ッ!?」ビクッ
明音「何を言うのかと思えば……」
メアリー「ほんとですねー」
「お、怒らないのか？」
明音「だって言いたい事は高木邸で言ったもの、私の告白は」
メアリー「私はあまり強めに言っていませんでしたが先輩の事が好きなのは変わりませんから」
明音「それに愛の重さは私達の方が上だもの」

メアリー「そうです、途中から来た人達には負けません！」
明音「だからね拓真」
メアリー「彼女達もですが私達もしっかり愛してくださいね？」
「ああ、もちろんだ」
明音「もし足りなかったらこっちから補充しに行くから」
メアリー「謝っても許しませんからね？私達は数年待ったんですから」
「最善を尽くすよ」

そうして俺は２人を抱きしめた
正直に言うと俺はこの時点で一般的観点から欠落している
それでも俺は彼女達を愛するだろう
しばらくした後に離れたが
顔を真っ赤にしてお互いを見れなかった
落ち着いた所でコータの進捗を確認しようと動き出した時だった

男「大変だ！」

また問題が起きたらしい